

nantokasei.com

瀧山敏郎

…まともな受験教育への提言

なつとらん！受験産業

Toshiro Takiyama

第1回 私は誇りある一介の受験屋。もうやめようや！ わけのわからん教育的抽象論議を！

■塾はサービス教育産業

フィンランドは学力世界一である。徹底した勉強する環境作りをしている。図書館が多いのは他国に類を見ない。次に徹底した補習である。日本では補習は恥と見なされる傾向があるが、フィンランドでは、子供たちが自由に取れる選択肢の一つとして位置付けている。これには、恥でないと、周りの教師、親、地域社会が支えている。

日本の塾の多くは進学塾である。進学塾では成績のいい生徒をとることに必死になっているがこれには限界がある。圧倒的に多いのは可能性のある普通の生徒である。この生徒たちを伸ばしてこそ新の進学塾になるのである。また企業的に言っても採算がとてるのではないらうか。

勉強する学生に一番欠けているのは、読解力である。読解力はすべての教科の基礎である。塾の環境づくりとして読書室の開設を勧める。読書室を持っている塾も私は見てきたが、まだまだ普及しているとは言えない。民間教育としての一翼を担っている塾だからこそできるのである。公立学校、私立学校が公教育なら、塾は民間教育である。学校が表なら塾は裏。裏に徹することだ。最近塾が教育、教育と言い過ぎる傾向がある。塾教育はサービス行である。どれだけ生徒に、親に満足を与えるかだ。「抽象的教育論などいらん」「学校の下請け的な塾などいらん」「学校の間、期末テストに振り回される塾などいらん」「公立、私立学校と競争する塾などいらん」。

私は小学校、中学校、高等学校で23年間、大学で非常勤として3年教鞭をとってきたが、大学を除いて、すべてサービス業だと思っている。全国で学校に圧倒的に勝っている塾がある。私がこの目で見えたことを伝えたい。

まず経営者の姿勢である、次に講師である。全国の塾経営者は塾でもやろうかという輩が多すぎる。この業界へは素人が入ってきてはいかんのだ。受験に関しては、私は学校の教師はアマで、塾の講師はプロであると確信している。また全国の父母が塾、学校に期待していること（全国の父母会の講演でのヒアリング）は、1. 成績を上げて欲しい
2. 賤をしてほしい 要約するとこの二つが圧倒的である。塾の使命は成績をあげることが第一義であることは言うまでもない。私は断言できる。すべての生徒は成績があがるのだと。（特別の場合を除いて）

■話にならん経営者

1. 経営能力がない（プライド一流、感性二流、行動力三流、経営我流）
2. 欠陥だらけの会社（名前だけの会社、会社ごっこ）
3. 経営者の人間性（偽者、私利私欲、能力のなさ）
4. 人材育成力のなさ（ビジョンがないから社員、講師の育成力がない）
5. 人間力、教育力がない（事もあるうに、将来可能性のある生徒を預かるのに、哲学観、道徳観がない）

6. 儲け一辺倒（もちろん儲けることは大事である。しかし儲け方にもルールがある）

■話にならん講師

1. 能力のなさ（能力と肩書きがアンバランス）
2. 責任感がない（すべて生徒のせいにする）
3. まったく勉強していない（リーダー学、人間学、ビジネス学を勉強せよ）
4. 弱気、内気、陰気（この業界に入ってくるな）
5. 授業＝商品力の低さ。ただ答えを言って終わりの授業ではなくて、自分流の解りやすい手法、展開、プレゼンテーションの開発
6. 営業マインドの低さ（生徒減る、どの面さげて金もらう）

■英語や数学がむずかしくない、勉強が難しい教える側の徹底した教授法と各教科に対するわかりやすいプレゼンテーション。教師は自分の教える教科に対して解答を出すだけでは駄目である。教師が当たり前だということは生徒には通じない。いかにわかりやすく、繰り返してわからせることだ。そしてその教師自身の教授法、自分の教授法の商品化である。商品化ができるかできないかがプロとアマの差別化である。

瀧山の例：『これで決定的に差がつく4分の3は取れる英作文のテクニック』『200点中100点は取れる究極の語らい』『あと20点取れる秘伝合格ストーリー』『英文が怖くなくなる訳すな英語20か条』『偏差値の高い受験生が陥るケアレスミス』等。教科書のネーミングもただ単に、英文法、英文解釈、英文構文ではなく、生徒にもわかりやすい口語体で、生徒の目線をつけるべきである。教える側のテリトリーに生徒を引き込むことだ。そしていつもなぜ生徒が理解できないのか、教師は問うべきだ。つまりノウハウではなく、ノウホワイだ。

■できる生徒でなく、わかる生徒

われわれ教師には一部の優秀な生徒がターゲットではなく、圧倒的に多い学力低下の生徒がターゲットだ。できる生徒は数学の問題を解くのに10分しかかからない。できない生徒は30分かかかる。後者の生徒はできたときの感動と自信は前者の数倍である。ウサギと亀である。要するに、時間と教師の忍耐が要求される。そういう意味で、「ゆとりの教育」は学力低下に拍車をかけているのである。公教育は生徒の自主性を叫んでいるが、とんでもない。自主性任せは無責任である。いい意味で生徒を隔離し、包囲網を張ることだ。しかもそれが生徒にわからないように。

私の長い経験で、偏差値35（高3、4月時点で）から早稲田に合格した生徒がいる。まず基礎を短期間で詰め込む。基礎英語なんてテストに出ないが、この基礎を理解しないと、英語的発想ができない。次に入試英語の基礎をやらせて、本人がわからなところを、本人見つけ出させ、質問させる。本人がわかるまで、妥協しないで本当にわかるまで確認する。次に実際の入試問題の英文長文、英作文、四択問題、整除問題というふうに、本人がわからないところを同じように質問させる。これを繰り返す。ちょうど川の流が止まっているときに、ゴミをちょっと取り除いてやると、流れがスムーズになるように。

ここで大事なのは、基礎英語、入試問題の教材作りである。市販の教材では、一人ひとりに対応できない。生徒がどこで落ち込んでいるのか、生徒の目線で教師がみられるかどうかである。どの教科においても、生徒が一番苦手とするところを列挙して、最大公約数を取って、それを元に教科書の自主編成を作るべきである。民間教育である塾が公教育に勝つためには、このことができなければ勝てない。

第2回 どの生徒も捨てるな！今こそスター教師の登場を！

どの学生も学力が上がるという神話は生きているのだ。ほっておくとどの生徒も成績が上がらないものとする。教師は厚かましいくらいに積極的に関与すべきで、自主性に任せては駄目。生徒は基本的に勉強したいのである。知らないことを知りたいのである。低学年の時にすでにギブアップしているのは、社会の責任であろうか。親の責任であろうか。社会の責任であろうか。責任転嫁の風潮は、われわれ教育界に根強くある。教える側の姿勢に大いに責任がある。

学校でよい先生に当たるのは、丁半博打に近い。よくお母さんの井戸端会議の中に、新年度の時期に、今度の担任は何先生、よかったね、悪かったね。という話が日常茶飯事である。塾は生徒側に選択権があるのである。生徒に選択させようよ。どうぞ天秤ばかりに掛けてくださいとね。ここに、民間教育の勝つチャンスがある。教師の不人気の原因を挙げて、消去法の一つ一つなくしていこう。

■教師不人気の原因ワースト10

- (1) 何を言ってるのかわからない。(プレゼン、実力がない)
- (2) 授業が面白くない。(工夫がない、モチベーションがない)
- (3) 声が小さい。元気がない。陰気
- (4) 怒ってばかりいる。日によって機嫌がよかったり、悪かったり
- (5) えこひいきする
- (6) 雑談が多い
- (7) 自慢話が多い
- (8) 服装がダサイ
- (9) 人間的に、教師としても尊敬できない。
- (10) 生理的に嫌い(教える全ての要素が欠けている)

フィンランドでは、教師は尊敬されている。当たり前なことだが日本では昔は尊敬されていたのである。最近情けないかな。この尊敬がない。M教師(問題教師)という固有名詞すらなっている。塾に対するアンケートのなかで、(1)塾は楽しい(2)塾の先生は何でも相談できる(3)学力がつくこれらは、塾(民間教育)が、公教育を一步リードした瞬間である。このワースト10を消すのは容易ではない。不思議と一つ消すと2つ3つと消えていくのである。どこからでもいいから手をつけよう。

私も、学校を辞めて、初めて予備校の教壇に立ったとき、最初は自信があった。しかし実際は、生徒は私の授業に関心を示さず、クラスから生徒が減っていった。なぜだろうかと思った。現役時代の私の授業は大変人気があった。予備校でも学校と同じ授業をしていたのだ。これが決定的に間違っていたのである。予備校では、答え合わせ的な教え方では駄目で、答えに導く論理的思考とテクニックが必要で、独自性のある考え方の商品化（これぞ俺の究極の教授法）が要求される。その辺の受験参考書に書いてある通りのことを反復しても生徒はついてこない。

いわゆる自分流のバイブルを作らなければならない。それには、過去問を徹底的に調べ、分析することである。その過程の中で、教えることと、教えなくていいこと、入試問題に近い教科書を作ること、何よりも的中することに気がついたのである。プロ教師は、切り捨てることを知っているのである。つまりこれはやらなくていいと言い切れるのだ。そのためには上記の通り過去問を徹底的に分析することが必要不可欠である。

それから私のしたことは、先輩の特に生徒に絶大な信頼を得ている先生の授業を何回も見学させてもらったのだ。そこから学んだことは教え方の商品化である。教師は教えるものだと、現役の学校時代は当たり前であったが、教師は自ら学ぶことにあると。徒弟制度と一緒に、すごい奴から盗め。

■動機付け

基本的に、私はすべての生徒の学力が上がると思っている。その一つの要素として教える側の構えである。つまり、動機付けである。

動機付けには、内的動機付けと外的動機付けがある。

内的動機付け

- (1) 自立志向・・・勉強が楽しい
- (2) 努力志向・・・自分から進んで勉強の計画をたてる
- (3) 現実志向・・・進学があるから

外的動機付け

- (1) 他力志向・・・友達に影響されて
- (2) 競争志向・・・友達に勝ちたいから
- (3) 報酬志向・・・ご褒美のために
- (4) 教師依存志向・・・あの先生だからやろう

子供たちを取り巻く勉強、学校、家庭の環境は決して良好だとは言えない現状がある。ゆとり教育の下で子どもたちは何をしたいのかわからない。まさしく自主性任せは無責任である。特に小学校、中学校ではいいものは押し付けたほうがよい。特に基礎力強化は理屈なしに詰め込み方式がよい。

詰め込みの段階で子どもたちにとって一番問題なのは、挫折を経験したことがないということ。つらい経験をさせよう。内的動機付けの子どもたちは現状から言って、現実的でない。

そのなかで教師依存志向こそが我々の縄張りである。あの先生だからやろう。昔、教師は聖職であった。私は今でもそう思う。特に、低学年になればなるほど教師の人間性、聖職性、インストラクター性、プレゼンテーションのうまさ及要求される。下手な教師にかかると人格まで壊されるし、勉強嫌いになる。生徒は本来勉強が好きなのだ。教師はもっと現実を素直に、偏見ではなく、生徒と同じ目線で見ると努力をしなければならない。

■教師依存志向型の教師になるために

第1章 私の履歴にあるように、小学校、中学校、高等学校の教師時代に学べなかったことがある。私が代々木ゼミナールでスター教師になるために学んだことは、

- (1)学者・・・専門教科に熟知している。
- (2)医者・・・生徒の悩みを取り除く。
- (3)易者・・・生徒の将来にアドバイスできる。
- (4)役者・・・黒板の前で演じる。
- (5)芸者・・・生徒を楽しませる。

いわゆる5者である。まさにスター教師になる条件といえる。

第2章では、教師依存志向型の教師・上記5者の要素を持つには「教師は魂の演技者であれ」というのはロシアの教育学者マカレンコの言った言葉である。どれだけ演技ができるか。教師自身に生徒の胸を打つ感動の話ができるのか。教師の体験、苦勞、挫折、涙、劣等感の部分をごだけ出せるのか。生徒は教師に無意識に人間性を求めていると思う。教師に腑の部分を持てば持つほど、生徒は近づいてくるのだ。今回は、第3章「人気のある教師の人間性とは」の分析と、もっと具体的に細かく提案。

第3回 教師依存志向型の教師・スター教師になるために(1)

教師になるためには3つの要素がある。(1)情熱 (2)努力 (3)感性。言葉としては簡単であるが、この簡単な言葉の中に教師が忘れていた大きな宝がある。塾の教師になるための資格はない。つまり、何の教育も受けずに即教師である。これは、公立の教師になるのと同様で、何の訓練も受けずにすぐに教師になれる。

公立学校の教師になるためには、テストがある。

専門教科、教職教養、一般教養のテストである。専門教科のテストはそれほど難しくなく、教職教養のテストは丸暗記でそれほど時間をかけずに点が取れる。一般教養に至っては普通の社会人ならできる簡単なものである。塾の教師になるテストは何もないのである。

私は、以前から、塾を経営するのに、許認可が必要であると主張してきた。事もあろうに大事な子どもを預かるのに経営者はなんの勉強もしていないといっても過言ではない。要するに、塾も学校も教師として一番持っていないなければならないものを試すフィルターを持っていないのである。

全国でリタイアしている教師があとを絶たない。最近では京進における、殺人事件はその顕著な例である。何の訓練も教育も受けずにすぐ現場である。起こるべくして起こった事件である。暴力、セクハラは日常茶飯事である。

不良品の教師が氾濫している。新聞紙上でいうM教師（問題ある教師）である。教師になるには、先ず専門の知識を持って当然である。これすらない教師が全国の塾に相当する。「アホか」と言いたい。金儲けだけにうつつをぬかすな。塾といえども公教育の一翼を担っているという哲学観、倫理観がなければならないのである。実力、学力のない教師は自ら去れ。ここで私が提言したいのは、実力、学力があって当然の認識に立っての上の話である。

教壇に立つ教師は厳選して採用しなければならない。誰でも教師になってはいけないのである。

■情熱を持つ

何もないところから、情熱は生まれにくい。昇華という言葉がある。「物事がさらに高次の状態へ一段と高められること」という意味である。私なりの解釈は、始めは不純でも、最後に本当の意味での華を咲かせることだろう。有名になりたい。人気がほしい。金を稼ぎたい。いいではないか。私がそうだった。貧しかったので、若い頃より、お金がほしかった。予備校では、人気講師はコマ単価が高い。どれだけ、締め切り講座を出すかである。いかにたくさんの生徒が私の授業を受けてくれるかによって私の単価が決まるのである。「生徒減る、どの面さげて、金もらう」的を得た川柳である。当時の大手予備校で私はトップに立ったのである。

人気が出ると、当然のことながら有名になる。人気は生徒が決めることだ。生徒の目は厳しい。(1)授業がわかりやすい (2)言葉に切れがある (3)元気、活気がある (4)授業にメリハリがある (5)ユーモアがある (6)服装に清潔感がある等、あらゆる面から見てくる。意図的に人気を取ろうとしても失敗する。嫌味が出てくるのである。いかに自然体に行けるかである。人気を取ることにはなかなか難しいかなりの努力が要る。

情熱はマイナー志向から生まれやすい。子どもの頃の不幸な経験、屈辱、劣等感、貧しさ、一人ばっち等いわゆるマイナーなことから反発として情熱が出てくる。子どもたちは、いわゆる立派な先生からはそれほどの影響を受けない。子どもと同じ目線を持つのはマイナー志向を持っている教師といえる。生徒がどこで落ち込むのか、どこで悩むのか、生徒のSOSが体験としてわかるのである。また自分の問題と工て受け止めるのである。

京進の事件にあるように、学生のジャリ講師はただ名門大学を出ただけで採用され、何の社会性も持たない。生徒はどこで落ち込むなんてことを考えたこともないのである。ちょっと反抗されると切れるのである。教師は家以外では最初に反抗する大人である。反抗されるということは、その道も大いにあることは私の長年の教師人生で例外でなく日常あることなのである。

生徒の反抗大いに結構じゃないか。生徒は反抗して、先生にぶっつけてそのリターンを期待して待っているのである。マイナー志向の教師は自然に受け止められる度量を持って

いるのである。同じ心に傷を持った者同士が解りあえる優しさである。今の若い教師に一番欠けているのは、挫折の経験がないことである。どうして生徒の人のしんどさがわかるのだろうか。情熱なんか生まれっこないのである。アメリカンドリームがそうだ。リンカーンは極貧出身の奴隷を解放した大統領である。ボクシングのタイソン、ゴルフのタイガーウッズがそうであるように世界の頂点に立ったのである。有名、人気、金おおいに結構ではないか。マイナー志向が出来てこそプラス思考が出来るのである。最初からプラス思考はただのアホ。

第4回 教師依存志向型の教師・スター教師になるために(2)

■努力に手を抜くな

情熱を具現化したものが努力である。凡人は情熱だけで終わるのである。教師は凡人では駄目。非凡になれ。人間が君たちの前にいるのである。金は大事、でも金だけで塾を経営するオーナーは去れ。努力をしない奴は教師という職業に就くな。

1. 自分の専門教科に精通しろ…ただ単に答え合わせをするな。自分流の教授法の確立。

いわゆる教科の商品化である。(例) ①瀧山の長文恐怖症を吹き飛ばす速読速解法
②瀧山の点になる究極の語い ③瀧山のこれで決定的に差がつく4分の3は取れる
英作文のテクニック ④瀧山のあと20点取れる秘伝合格ストーリー タイトルも大事である。生徒にわかりやすい普通の日本語で表すことだ。ありきたりの英文法、英文解釈、英作文はインパクトがない。他の教科も工夫すればいいものがある。(例) 簡単に解けちゃう数学 生徒の目線でタイトルを考えること。

2. 授業をストーリーに組み立てよ。

まずイントロ (導入) は、今日は何を教えるのか、徹底してプレゼンすること。大事なことを最小に絞れ。最悪の教師は、全部大事だと言って、最後までべたべた、だらだら。眠くなる。生徒に「今日は何を勉強したの」「英語、数学、国語を勉強したの」と言わせたら、その授業は失敗である。各教科の具体的な項目を言わせることだ。もっと思い切って、これを覚えれば、後は忘れていいぞというぐらいのことを言え。

プロの教師とアマチュア教師の決定的な違いは、教える内容を切って捨てられるかどうかである。もちろん切るには、プロとして、切っても大丈夫という確信と、過去のデータを熟知しておかねばならない。わかりやすく、繰り返すことで、知識が定着する。そこで生徒は、わかることの喜びを体験する。そして、エンディングはもう一度今日の重要事項を繰り返して確認する。そして、次回の予告をして、次回も受けなければ、「せっかく今日覚えたことが無駄になる」と、ある種の不安感を抱かせる。要するに、腹八分で終わることだ。生徒は「わかる」ことの喜びを期待している。

3. 教科書をシナリオに。

教師が予習する段階で、授業は終わったも同然。答えの列記は予習ではない。結構答え合わせだけの教師が多い。シナリオ作りとは、・教科書にその日の授業の流れを明記する。・授業の初めに、その日のテーマをまず知らせる。・次に強調するテーマを示す。そして授業の展開に入っていくわけだが、大事なことは、単なる説明の答え合わせではだめで、答えを導くのに、なぜ、この答えなのかを立体的、論理的に説明し、その教師の個性を生かしたテクニックを駆使してよい。

一つの問題に一つの答えを出すだけでは広がりがない。その問題、答えの背景を示すことだ。出題者は何の根拠もない問題は100%出さない。必ず、意図がある。出題者の意図を見抜け。エンディングはもう一度今日の重要事項を再度確認。来週の予告。そして大事なことは、全部教えるのでなく、腹八分で終わることだ。来週につなげることで、来週も受けなければ損をする、ある種の不安感を持たせること。これは難しいが、挑戦してもらいたい。できればプロである。授業の合間に、できたら、教科書の内容に沿ったエピソードを入れれば動機付けになる。

4. 授業をショー (show) 仕立てに。

授業は楽しくなければならぬ。お客様は生徒である。どれだけ楽しませるか、満足させるか。教えてやるんだという考えは即捨てよ。学んでいただくのだ。徹底したサービスである。これが、学校の教師との究極の差別化である。教科書をシナリオにした上で、パフォーマンスは大いにやるべきだ。

気をつけなければならないことは、やたらにやると生徒からブーイングが出る。雑談が多いという批判を受ける。パフォーマンスの効果的演出はすばらしい授業、感動するほどわかりやすい授業の直後にする、しかも短時間に。効果抜群である。亡くなった落語の名人、桂枝雀の緊張と緩和である。パフォーマンスの種類は人によっていろいろある。

①笑い・ユーモア型パフォーマンス、②語りかけパフォーマンス、③ためになる説教型パフォーマンス、④じーんとくる涙型パフォーマンス、⑤知識、知性型パフォーマンス 自分の個性に合わせて、無理をしないで自然に出せるとよい。

5. 生徒は変わらない、教師が変われ。

学校であれ、塾であれ、教師は同じ生徒たちを毎日一年間教えることになる。自然と教師と生徒に飽きが始まる。そういう意味で生徒が変わることを期待してはならない。教師が変わる努力と工夫が必要である。私は36年間、一度も授業で飽いたことはない。楽しいのである。今日はどんな授業をしようかと思うとわくわくする。今日は徹底して基礎をやろう、難解な問題をわかりやすくやろう、おもしろい話をしよう、苦労した経験談をしよう、ネタはいくらでもある。生徒が悪い悪いという前に、教師自ら努力して己を変えよ。

6. 教育以外のことから学べ。

教師はもともと社会性が乏しい。生徒から先生、先生、父母から先生、先生と呼ばれると何か、自分が偉くなったような気がする。特に、つい最近まで大学生であった若者

が、教師になるといきなり先生と呼ばれると勘違いをする。何様だと思っているんだと言いたい。もっと勉強しろ。生徒は社会性を親から学ぶ。教師は誰から学ぶんだ。もっと試用期間をおくべきだ。そういう意味で今の教員採用制度に問題あり。「新聞もろくに読まずに先生業」「子どもとは会話が出来る塾講師」「黒板の前に立ってるただの人」学校の常識は世間の非常識である。教師は特権階級ではない。一般社会でいろいろな分野でそれこそ汗水流して頑張っている人たちを見よ。生徒はその人たちの子どもである。親の悩み、子どもの悩みをもっと直視せよ。多くの人たちから学びなさい。

■そして感性が教師の最後の砦になる

情熱と努力ができれば感性は身につく。生徒の悩み、苦勞、非行から学ぶときに教師側に感性がなければ生徒と同じ目線に立てない。私は生徒を変えようと思わない。自分が変わろう。そして評価は生徒に任せよう。

たまには、人の話を真剣に聞け。そして真似よ。教師に限って人の話を聞かない。社会性がないのである。ある私立高等学校での教師向けの講演を頼まれたとき、最初から居眠りである。その女性教師に「あなたの授業で生徒が居眠りをしても注意する資格はない」。

要するに学ぶ姿勢がないのである。「研修もすべて死に金豚真珠」読書、音楽、映画、スポーツなど、仕事以外のすべてに関心を持て。私は、水泳、マラソン、カート、四国の88ヶ所巡り、熊野古道登山から学んだことは枚挙にいとまがないと言える。赤ちゃんを見よ、わが子を見よ、若者を見よ、母を見よ、父を見よ、じいちゃん、ばあちゃんを見よ。必ず感性をくすぐる心がある、話がある。生徒に学べという前に、教師自ら学ぶべきである。私は、大学でも、先輩の教師からも学んだ覚えがない。生徒から学んだのである。だから人気があると自信を持って言える。

「勉強しろ 先生 あんたが 勉強せえ」

第5回 塾長さん、宣伝費にお金をかける時代ではないですよ！

講師を教育することに投資してみませんか？

本物の塾をマジで作りませんか？

衛星放送のデジタルよりも、人間のにおいがするアナログの時代だよ！

授業における差別化とは

前号で情熱・努力・感性についての重要性を書きましたが、だから即トップ講師になれるわけではない。滝山が言う情熱・努力・感性は出発点である。端的に言うと情熱・努力・感性のない奴は教壇に立つな、去れと言いたい。塾の講師も、学校の教師もサービス産業で働いているという自覚が必要だ。

最近ある塾講師に会いました。男性、年齢34歳、独身、塾歴10年、真面目、高学歴。彼が私のところに相談に来たのは、授業についての相談です。内容は：1. 生徒がついてこない 2. 支持率が下がってきた 3. 授業が空回り 4. 教室の生徒が減ってきた 5. 塾長からしかられ、給料が減った。以上が主な相談事である。彼はまさしく、情熱があり、努力をし、すこしだが感性がある。なぜか？ 情熱丸出し、夜遅くまで予習し努力しているのに。「仏作って魂入れず」である。「生徒は大事である」という総論はいいのだが、問題は各論である。彼は私の教材である。彼の悪いところから学んだことをシリーズで列挙して各論に迫ろう。

ヘタな授業・・・元気がない・覇気がない・聞き取りにくい・単調すぎる・変化がない・メリハリがない・説得力がない・わかりにくい

聞き取りにくい、覇気がない、メリハリがない、説得力がない、単調すぎる、おもしろない

その結果は生徒側に 1. 集中力の阻害 2. 意欲の阻害 3. 思考の阻害 4. 理解の阻害 5. 記憶の阻害がおこる。

■声

基本的な発声で大事なことは、声が前に出ているかどうかである。生まれつきの声質はしかたがないが、それを話すスピード、声の大小、声の強弱でカバーすべきである。生徒が授業中によく眠るのは、大いに教師側の声にある。大きな声を出していると眠らないのかというとそうではない。声の大小ではなく、声の一定で眠るのである。メリハリのある授業の一つには声の大小・強弱・高低・スピードをうまく取り混ぜる訓練をすべきである。授業を参観した父兄の感想の中で、授業が短かったというのがある。これは上記の声の使い方がうまい教師なのである。FM放送のアナウンサーが受けるのはこのことを言っているのである。塾にも、学校にもボイストレーニングを取り入れるべきだ。特に、学校では一人の教師にまかせきりで、何のチェックもなしだ。だから、M教師が続出しているのが現状である。教師をもっと科学的に訓練さすことだ。

■言葉づかい

幼稚、乱雑、粗雑。言葉の誤りは思想の誤りである。時として、生徒に近づくテクニックとして乱雑に話すことも必要であるが、基本はきちんとすべきである。ヘタな授業をしている教師には必ず、言葉癖、ムダ語が多い。これが聞き取りにくい、眠たいの要因になり、聞き手に嫌悪感を与える。重要なポイントを教える最中にクセ、ムダ語が出てくると生徒の集中力ががくっと落ちるのである。典型的なムダ語、言葉グセに次のようなものがある：「あの～」 「え～と」 「まあ」 「その～」 「ねね」 このクセが長ければ長いほどまた繰り返すと上記の五つの阻害が起こるのである。

「ぼかし言葉」「逃げ腰言葉」「弱腰言葉」もできるだけさけるべきだ。

「多分」「できるだけ」「とりあえず」「かもしれない」「だと思ひます」このような言葉が出るのは自信のない証拠である。要するに自分の教科に関して、徹底した予習をしていない、データ、分析がないからである。ひどい教師は解答だけを教科書に写しているだ

け。実際私の長い教師生活で何回も目撃している。こんな教師に講師に、教育を語る資格はないのである。

■言葉の間・話の間

「間」は話すことを商売にしている人にとっては一番大事である。しゃべりっぱなしは相手を見殺しにして、自分よがりの不快感を与えるだけである。自画自賛で申し訳ないが、私は「間」の名人であると言われる。私がよく使う例を挙げておこう。授業では教室に入ってすぐに授業をするのではなく、ほんの少し「間」をおく、その間に生徒がこちらを向くのを待つのである。授業中にここ一番の重要な問題を解いているときに、少し「間」をおくことで生徒の視線を私に向けさせる。「あれ、何で黙ってるのだろう」と不思議に生徒は思うその時に「もう一度繰り返すぞ、むちゃくちゃだいたいだからな」「間」はまた生徒に考えさせるためにも必要である。但し、「間」を下手に使うとそれこそ生徒は白けてしまうしダメ教師のサボりの場になる。「間」はすばらしい授業・目からうろこが取れるような授業の最中に使うべきだ。

また教師、大人を相手にした講演の場合は最初の冒頭に10秒くらいの「間」を取る。一番ヘタな講演者のイントロの言葉は「ただいまご紹介いただきました～です」。私は最初から本題に入ることにしている。又は、「昨日、電車に乗っていると、ある人に会った。その人が、私に……」といった具合に授業とは関係のないことを言って、こちらを向かせて、なにを言うんだろうという興味を持たせるのも一つの手だ。

又、「間」は時間を置くだけでなく立て板に水のごとくにしゃべることも必要である。かつて私の友人であり、ライバルである古典の荻野先生はよく「間」を学ぶために私の授業をのぞいていたものです。先生は「間」を学ぶために、露天商のお兄さんの叩き売りの口上を学んだり、落語を聞きに行ったりしたそうです。私は、特に、落語の桂枝雀の落語を聞きに行ったものです。

トップと言われる講師は絶えず学ぶことを忘れないのです。どんなことでもやって見ることだ。自分の声を録音して欠点を見つけるとか、トップと言われる講師の授業を見ることだ。ヘタなダメ講師ほど勉強しない、努力をしないものだ。先ず、物まねから始めよ。

■センテンスの簡潔性

下手な講師のしゃべり方の典型的なものは、だらだら長く、要点を絞らないで、しゃべっている言葉に終わりが無い。聞き手の頭の中で、句読点が打てないようなトークはいけ無い。生徒の頭の中に、ノートに生徒自らまとめやすくしてやるためには、ワンセンテンスの簡潔性が大事だ。生徒が「なにを言ってるのか分からない」「眠たくなる」の現象はセンテンスの簡潔性がないのが原因である。

百歩譲って講師の言ってる内容が重要で、的を得たとしても、分ろう分ろうとする生徒の思考を邪魔しているのである。もったいない。少し改めるだけでまったく生徒の反応が変わる。これは授業の営業である。

家に帰って、親が「塾の先生はどう、よく分かる」と聞かれて、子供が「よくわかるよ」と言わせるのが大きな営業である。講師は意図的に変える授業ををしなければなら

い。説得力のある授業は、歯切れのいい簡潔なセンテンスを丹念に、丁寧に積み重ねることだ

第6回 授業における差別化シリーズ

・・・地味に着実に！ちょっと変えれば大きく変わる！手を抜くな！

■ 危険な学校再編・塾チャンス

最近、学校再編が目につく。公立高校が中学を作ったり、大学が小学校を作ったり、果ては大学による経営困難な高校のM&A、まさしく乗っ取りである。これもすべて生徒の確保である。客の取りあいである。大手学校企業による弱者いじめといっても過言ではない。村上ファンド、ライブドアと同じではないか。学校沈没である。

教育は教え、育てるが原点である。恐れ多くも、将来の日本を担う子供を作るのに客（生徒）取り合戦にうつつをぬかしている。内容があるのかといたい。小学校から大学まで一貫教育と聞こえはいいが、学校による生徒の骨抜きである。がんばらなくていいのである。「しんどい、苦しい、悔しい、劣等感、がんばる、自分と戦う」これらの経験は子供を作る宝物である。結果的に学力がつかないのである。

今若者に一番欠けているのは、挫折を経験したことがないことである。経験しないで学校を卒業しているのである。教師もそろって生徒をよいしょし、甘やかし、怒ることすらしない。怒るときも「お前のために怒っているのだ」半分逃げ腰、責任転嫁の怒り方だ。社会正義、学校正義、家庭正義の観点に立って「許せないから怒っているのだ」となぜ言えないのだ。昨今、未成年者による犯罪が増えている一因は学校にもある。

親の中にも、苦労しないで小学校から大学までいけることを容認している風潮がある。しかしこれは結果的には子供を安全に育てることにはならないと自信を持って私は言える。『かわいい子には旅をさせる』

である。昔の格言は本当に的をついている。「ふるきを訪ねてふるきを知る」である。

「勝ち組・負け組み」しか考えない新しいことを知る必要はない。

今こそ塾の役割がきた。授業における差別化シリーズ・・・地味に着実に！ちょっと変えれば大きく変わる！手を抜くな！

塾（あえて言うなら私立学校も）は公立学校とは対極にあることを忘れてはならない。多くの塾は学校に振り回されている。学校下請け株式会社である。このような塾は必ずつぶれる運命にある。もともと塾は必要悪、隙間産業、裏産業であると私は思ってきた。だからこそ塾の存在価値があったし、好きだった。

連載1で塾は裏に徹する事だと言ってきた。しかし、今言いたい。上記のような学校再編をしている状況では、もう表に出て堂々と戦うべきだ。必要善になってほしい、大手産業になってほしい、表産業になってほしい。その為には、お上与戦う姿勢がなければならない。学校下請け株式会社塾では戦えないのである。武器は教育内容（教科書）・成績が上

がるシステム・教師である。そして生徒に親にどれだけ満足してもらえるかである。一番前に立つ教師は安物では戦えないのである。だから、アナログ的な努力が必要である。前回の「センテンスの簡潔性」から次の地味な差別化シリーズを続けよう。

■センテンスの完結性

ただただ何を言っているかわからない長い授業では知識が定着しない。むしろ学ぼうとする生徒には邪魔以外何者でもない。ワンセンテンスの中身が充実していること、重要であることを認識させること、しかも途中に関係のないトークを入れないこと。付加的なこと、例外的な問題、ト書き的なものは、完結した後で別枠で教えることである。とにかく、完結性のない授業は生徒にとってはわかりにくいのである。

簡潔性と完結性のある授業は、わかりやすいし、説得力がある。聞き手の思考力や理解を増す。結果、授業が短く感じるし、眠たくなるのである。

■ボキャブラリーの貧困さ

とにかく最近の教師は語彙力がない。教師だけじゃなくて人の前に立つ商売人にとって語彙力は生命線である。語彙力とはなにか、たくさんべらべらしゃべることではないし、評論家のように立て板に水のようにしゃべることでもない。聞き手が聞いて、ビジュアル的なイメージを連想させるトークである。一口に言って難しいが、訓練することで出来る。

語彙力の貧困な人に共通しているのは、修飾語がすくないことだ。擬態語、擬声語、比喩的な語を多く使う訓練が必要。表現力を豊かにするにはまねることだ。盗めといたい。連載5で、同僚の古典の荻野先生は露天商のお兄さんの口上を学んだと紹介しました。もちろん荻野先生は語彙力は私なんか比べ物にならないほど、豊富である。口上のお兄さんから学んだのは、表現力と間である。いかにお客さんを逃がさないかということである。

またトークの順序である。結論を先に言うか、後で言うかにプロはこだわるのである。残念ながら、語彙、表現力を豊かにする努力が欠けている人が多すぎる。テレビから、映画から、講演から、小説から学べ、盗め。私はよく、新聞を読んで感動した記事を、小説を読んで講演に役に立つ言葉を、テレビを見て若い人の関心事などをファイルしている。連載3, 4で紹介した、「情熱、努力、感性」がない教師は人は人の前に立つ仕事に就くなといたい。

■アイコンタクトの問題

視線を長く投げかけるかどうかである。焦点のない目つきで講演をしている人を見るが、何の感動もない。私は連載5で書いたように、デジタルではアイコンタクトは出しにくい。チラッとではアイコンタクトの効果はない。厳しく、やさしく、情熱的に「じっとみつめる」ことだ。

アイコンタクトが少なすぎると、次のようは現象が出てくる。1. 冷たい 2. 事務的 3. 近づきにくい 4. 面白くない 生徒側からいうとこの先生についていこうという気持ちになれない。

たかがアイコンタクトされどアイコンタクトである。表に出て戦うのであるから、すべてに、差別化をはかるうではないか。

■感情移入の問題

感情が入りにくい衛星放送よりもアナログの授業が本来の塾だった。生徒や先生が笑ったり、怒ったり、真剣になったりする教室が我が家であった。東京のある大手の大学受験塾のコンセプトは「おかえりなさい」である。時代の流れに逆行するアナログ的で成功している。教育の基本はface to faceである。デジタルは感情が入りにくいのである。簡単に言えば、教壇の上で演じられるかどうかである。素のままで立ってる若い教師が多い。説得力もない、感動もない。『黒板の前に立ってるただの人』である。

教壇は舞台である。昔、私がまだ新人の公立の教師をしていたころ、まだ授業もうまもなく、今のように研修会もなかった頃は、先輩の授業を見て真似てた。とにかく、生徒のことを考えないで、とにかく一生懸命に、元気に、それこそ感情丸出しでやっていた。後で生徒が「なぜそんなに一生懸命にやるの、僕らをほったらかして」「でもなんか授業はうまくないけど、ええ感じやった」といつてくれた。人生の先輩、大人が一生懸命の姿をみて好感を持ってくれたのだと思う。少々間違ってもいい、下手でもいい。彼ら生徒はキチント見ている。感情移入なしに教壇に立つな。昔、代々木で学んだことは、教師は5者になれという言葉だった。

「学者になれ、医者になれ、易者になれ、芸者になれ、役者になれ」

第7回 子どもの目線に立ってサービスに徹しよ。

教育の御託をいう前に授業スキルを磨け。親が見りゃサギだと言われるこの授業。

■「授業における差別化とは」シリーズ

「連載5」から授業における「差別化とは」をテーマにかなり細かい、地味なシリーズを提案してきた。今回はその最終章である。もう一度項目だけを復習しておこう。

1. 言葉の間・話の間
2. ムダ語・言葉グセ
3. センテンスの簡潔性
4. センテンスの完結性
5. アイコンタクトの問題
6. 感情移入の問題
7. ボキャブラリーの貧困さ

■イントロの問題

授業の始まりがいかに大事であるかは認識がないのが現状である。ぼさっと立って、なにも指示しないで勝手に授業を始める馬鹿教師がいる。無為無策の教師がいる。教師は聖職であり、教えることに関してはプロであるべきである。医者だって、弁護士だって、建築家だって、料理人だってそうだ。しかし教師だけはなんのチェックもない。教壇の前で遊んでいると言われてもしかたがない。

イントロの機能は次の通りである。

- (1)今日のテーマをはっきり示し、何を勉強させるかを認識させる。
- (2) テーマの重要性と知らないと学力低下になることを認識させる。
- (3) 聞き手の注意と関心を引きつける。
- (4) 話のトーンを決める。

(1)については、大きな字で板書をし、具体的にテーマを絞る。下手な教師はなんでも重要だといってだらだら授業をする。そのうち何が重要かわからなくなる。ほかの事は忘れてもいい、今日のこのテーマだけは覚えるぐらいがいい。

(2)については、すこしおどかしていい。実力がつかない、希望する学校に入れたい、ここで差がつくぐらいいいってもよい。競争さすことだ。昨今、学力に格差がつくとだめみたいな論調が教育界にある。とんでもないことだ。学力や知識に差があって当たり前。勉強しないやつは学力がつかない。勉強するやつは学力がつく。当たり前ではないか。ハッキリさす事だ。私は、人間に差をつけろとは言っていない。平等の不平等があっちこちで見られる。

(3) については、個々の教師の工夫がいる。ただ聴くだけではだめ。教師の人間性も必要だろうし、わかりやすい他の例から入るのも一つ、要するに、生徒の目線に教師も立つことが出来るかどうかである。TV番組でアメリカの精神科医が自閉症の人間恐怖症の子供に近づくのにピエロの格好をして、子供に気に入られるようにと思って、病室に入るドキュメンタリーを見た。この医者は世界的名医の精神科医である。まさしく子供の目線にたったのである。俺は偉いんだといって、生徒を脅かす馬鹿教師は去れ。

(4) については、生徒のその日の状況を見て、また学力的に見て低い、高いによって、やさしく、あるいは厳しく、大きな声で、ゆっくりと、黒板の前で舞ってもよいではないか。私の場合は学力の高いクラスでは、淡々と、内容で勝負する。低いクラスでは説得型でひつこいくらいにゆっくりとくりかえす。イントロの成功、不成功はその日の授業の大きなキーポイントとなる。

■強調法の問題

授業の中での強調は生徒を授業にひきつけるためにも、知識の定着にも必要だ。強調といえば、「大きな声を出す、強く言う、ちゃんと聞け、ここが大事」と思っているがそうではない。大きな声を出し続けていると眠くなる、小さな声を出し続けると眠くなる。要するに、声の一定が聞く側の生徒の脳を刺激しないのである。私が使っている手法は：

1. 反復話法
2. ゆっくり話法
3. 強調話法
4. 弱調話法
5. 間をあける
6. たたみかける話法
7. 音の利用・・・チョウクを黒板にたたきつける
8. ボディーアクション。

これらの手法を繰り返し使うことだ。練習すると頭で考えるのではなく自然と身につく。プロ講師はこれらのことが自然に身につけているのである。生徒側から言うと「あの先生の授業は時間が短く感じる」と言わせるのである。とくに小学生、中学生は学校や塾を休むとき親に「今日しんどい、体がだるい、なんとなく行きたくない、面白くない」と言わせるのは、簡単に言うと「授業が面白くないのである」。「授業が面白い、楽しい、わかりやすい」は塾であろうと、学校であろうと教師の生命線である。

■バーバルとノンバーバルのスキルの低さ

バーバル要素〔聴覚にはいるもの〕・ノンバーバル要素〔視覚に入るもの〕 生徒はこの2つの要素で聞いているのである。「聴く」という漢字は、耳+目と心から成り立っている。三位一体である。皆さんは先ず耳と目に訴えることだ。心で聴かせるのはプロの職人の領域である。失礼ながらまだ早い。というのは全国を講演して心で聴かせる教師に塾でも、学校でも会ったことがない。

実は生徒はわれわれ教師が考えている以上に教師をよく見ている。服装、ネクタイ、頭髪、めがね、におい等を。重要なノンバーバルは、「表情、アイコンタクト、身振り、手振り、黒板の前での動き」である。表情は授業の最初は笑みがいい（自分の勝手な事情で機嫌が悪い教師が多く見られる）、授業の内容によっては、また生徒を叱る場合は厳しい表情もいい。一番避けねばならないのは、軽蔑の表情、無視の表情、やる気のない表情、疲れている表情である。

アイコンタクトは連載6で記載。身振り、手振りは重要な内容を説明するとき、じっとして教壇の椅子に座ったままでは説得力に欠ける。生徒に近づいて、ときには順番に机の間を廻ることも。黒板に書いている問題を指で指して生徒の目線を黒板に集中させ、強調するときは拳を上げることも、時には生徒が正しい答えを言ったときは拍手したっていいではないか。

特に黒板の前での教師の動きが悪い。私は教師塾を主催している。生徒は先生である。毎年京都で研修会を行っているが、一番注意することの一つにこの黒板の前での動きについてである。ほとんどの教師は板書をするとき尻を生徒のほうに向けて、しかも黙って書いている。生徒のほうに顔を向けて、半身のスタイルで書くべきだ。書きながらしゃべる訓練をすべき。バーバルとノンバーバルを同時にすることだ。つまりしゃべっているときにいかにうまくノンバーバル要素をのせるかである。人の前に立つ職業は必ずバーバル要素とノンバーバル要素が必要である。

人間の情報吸収能力

視覚	60%
聴覚	20%
触覚	15%
嗅覚	3%
味覚	2%

人間の記憶保持率

記憶保持率

	3時間後	3日後
視覚だけで吸収した情報	72%	20%
聴覚だけで吸収した情報	70%	10%
視覚・聴覚両方で吸収した情報	85%	60%

このデータで分かるとおり、いかに視覚に訴えることが重要かを示している。

『お前らすぐに忘れるな、この前にやったやないか、もっと暗記して来い』と叱り飛ばしている教師がいる。ばかである。授業が下手だから、何も工夫していないから生徒の記憶保持率が低くなるのである。すべてにおいて、スキルがないのである。

生徒のせいにするこんな教師どもに限って、一教室の生徒数を減らせとか、持ち時間を減らせとか、残業手当を出せという。仮に、そうしても、やっぱり下手な授業をする。教育的情熱、努力がない。公教育においては教員免許更新制にするのが当たり前、文部科学省の08年以降の導入は遅きに失する。

第8回 公立との差別化。今がチャンス！

塾、私立高校はサービス産業に徹しよ！

すべてにおいて総点検し、差別化を具現化せよ！

瀧山の教師十訓

■数字合わせの教育ごっこはやめよ。

最近、新聞紙上で必修科目の履修漏れが問題になっている。公立高校、私立高校含めて8万人以上の履修漏れが明らかになった。学習指導要領で必修となっている世界史を生徒に教えてない高校が多数発覚したのだ。ルールを無視した学校の責任は大きい。また、その遠因は文科省にもある。私の意見は世界史が必修になった時点で、おかしいと思った。世界史は選択にすべきだと当時から主張していた。日本史を中心に考えることのほうが現実的である。

この指導要領を校長は知らないはずがない。すぐに、違反した公立の校長は責任をとって辞めるべきだ。公立の責任と私立の責任には軽重がある。私立は大学進学は死活の問題である。基本的には、補助金をもらっているとは言うものの、受益者負担が主であるのは私立である。どちらにしても生徒には何の責任もない。数字合わせのために、無理に、冬休みや、卒業式を延ばして補修することは絶対反対だ。大事な受験を控えたこの時期にしわ寄せを生徒の持つていくのはもってのほかである。

超法規的に未履修のまま卒業させることのほうが現実的であるし、支持を得やすい。法律よりも生身の人間のほうが大事である。大学受験の現実と学習指導要領の理想のギャップを生徒の立場で検討し、早急に結論を出すべきだ。未履修のまま卒業してもたいした影響はないし、人生は大きく変わらない。

未履修よりも今一番考えなければならないことは、もっと深刻ないじめ、登校拒否、自殺、学力低下の問題だ。よく、生徒の問題は親の責任であると言われる。私も、否定はしないが、それなら学校はいらぬことになる。親の責任の範囲を超えて子供たちはあらゆる環境で、友達で影響されるのである。いじめは、自殺は、登校拒否は、学力は親の責任かといいたい。今こそ教師の出番である。「今こそ求められる教師像」

「塾に学べ、私立学校に学べ」私の知ってる塾には、私立学校にはいじめはないのである。自殺者もない。なぜか、生徒は目標を持ってきているのである。また、目標を持たせることに日々努力しているのである。生徒を定着させるには、勉強だけではなく、悩みの相談にのっている。なぜか、生徒はお客さんである。サービスに徹している。企業発想で生徒を見ている。なぜ休んでいるのか？なぜ学力が低下しているのか？顔色が悪い、なんかあったのだろうか？友達はあるのだろうか？子供に対するお父さん、お母さんの考えは？ありとあらゆる面から分析しているのでなければ、お客さんは（生徒）は来てくれないのである。同じ目線で見ないと、生徒がSOSを出しているのに気づかないのである。

塾、私立学校は企業である。とくに塾は、行くか行かないかは生徒、親が決定権を持っている。いつでもNOといえるのである。塾、私立学校は生徒募集に必死である。集

めた生徒をありとあらゆる方法で満足させねばならない。いわゆる、CS(customer's satisfaction)である。教育、教育と言ってる公立学校はそうだろうか。「ゆとりの教育」といいながら何の手も打っていないのである。

今回の未履修の問題でも、ゆとりに名を借りたサボりである。「週5日制」の導入で授業時間が足りなくなったことがそもそもの発端である。いじめは公立中学に集中しているのではないか。何の分析もしていないのである。いじめがおこってから調査しているのが現状である。それもマスコミから突きつけられてからやっと動く。ましてや、学力向上については何の施策もしてないと確信できる。2年前に新聞によく出ていた「M教師」（問題のある教師）があるから、教師の免許の見直しの問題が出てくるのである。国会での教育法改正、改悪の論議は一般の国民の頭を素通りしているのと違うかといいたい。

■瀧山の教師十訓

- 一.教師は役者であれ。演じることだ。教師は魂の演技者であれ。悪意のないうそならついてもいい、そのことが生徒にやる気を起こさせるならば。
- 二.教師は医者であれ。生徒はなにに悩んでいるのか。同じ目線に立て。この生徒は俺が治す気構えを持て。とことん付き合う勇気を持て。
- 三.教師は易者であれ。生徒の将来を共に悩んで、一緒に夢を語れ。でかいことを言うのでなく、しんどい、苦労した話をせい。
- 四.教師は学者であれ。生徒から見て学力のない教師はすぐに辞めよ。（結構多いよ）すごい知識をもて、尊敬される教師になれ。あんな大人になりたいと思わせよ。
- 五.教師は芸者であれ。生徒を楽しませる術を勉強せい。たまにはずっとこけよ。近くにいるんだと思わせよ。ユウモアで叱れる教師になれ。
- 六.教師は指揮者であれ。迎合するな。生徒をひっぱていく気構えを持て。たまには怒れ。たまには強引にひっぱていけ。
- 七.教師は学習相談者であれ。学力が上がるのは、勉強だけの指導だけでは駄目。家のこと、友達のこと、兄弟のことで悩んでいることが多い。これらのことに徹底的に相談に乗ってやれ。そして、悩みを取り除いてやれ、必ず学力は上がる。
- 八.教師は演出家であれ。授業のストーリーをつくれ。教科書をシナリオにせよ。そして、もう授業が終わったも同然。解答だけを言ってるバカがいる。授業にメリハリが出来る。もう生徒は眠らない。授業をショウ仕立てにして、教室をは舞台にせよ。毎日が楽しいよ。教師も楽しめ。
- 九.教師は助言者であれ。主人公は生徒である。でしゃばるな。しかし強烈な助言者であれ。「勉強とは、なりたい自分の可能性を広げるプロセスである」教師はその助言者である。ある日、私が、生徒に「先生、なんで勉強するの」と問われたときに答えた言葉。
- 十.教師は教師であれ。教師は塾であろうと、私立、公立問わず、聖職である。偉い教師になる努力をせよ。我々が相手にしているのは人間である。こんないい仕事はないのである。誇りを持て、もてる教師になれ、尊敬されよ。その気がなければ、去ることも一つの勇気ある選択肢だ。

第9回 学者バカがそろって何が教育再生だ！

12月24日朝日新聞に、「塾禁止」論が政府の教育再生会議の中から出てきた。内容は「塾は出来ない子が行くために必要だが、普通以上の子は塾禁止にすべきだ。公教育を再生させる代わりに塾禁止とする」ということだ。しかし委員の中には「日本の数学のレベルは学校ではなく、塾によって維持されている」という意見もある。第一次報告の原案の中には「塾禁止」は盛り込まれていない。

とんでもない暴言だ。そもそも塾が出来た理由を知っているのかといたい。学者バカがそろって何が教育再生だ！出来る子も、出来ない子も、塾が支えてきた事実がある。公教育のていたらくが塾を増やしたのである。親は知っている。公教育の学校には任せられないことを。塾に通っている生徒の塾に対する感想は次の通りである。1. よくわかる 2. 塾の先生には何でも相談できる 3. 塾は楽しい 本来税金でまかなっている学校がやるべきことではないのか。公権力の座にいるものが塾禁止を発言するとは民主主義に対する挑戦である。塾はもはや一般国民が認めている民間教育機関である。多くの講師、その家族、関係者が夢を持って生活し、生業としている事実も付け加えておこう。公教育と塾がせいせい堂々と競争すればいい。それで塾がなくなればそれもよし。しかし塾を選択するのは国民だ。一部の教育音痴のエリートが決めることではない。一方塾に目を向けると、一部の教育再生の委員が言うとおりの、商業政策に走っている傾向があることも否めない。一部の大手の塾がこの傾向にある。そもそも塾が上場するのは反対だ。商品があって上場するのはわかる。将来、国を支える子供は商品ではない。

このコラムでも私は偽の塾はつぶれるべきであるといってきた。もともと塾も学校も子供、生徒にどれだけ学力、人格形成に貢献できるか、サービスできるかである。かつて、このコラムの中で「先生、なんで勉強するの」と言われて、キチント答えられるかと問うたことがある。「勉強はなりたい自分の可能性を広めるプロセスである」「教師は生徒の援助者である」

政治的論争に関係なく塾の先生、学校の先生は生徒にいつも向いていよう。政治家に、学者に現場の教育は任せられない。地味な学習を私と共に学ぼうや！

生徒を魅了し、やる気にさせる演出スキル

最近、小学校5年の生徒に会った。この子は塾にいつている。学校の先生も塾の先生もあんまり好きではない。だからその先生に習うことも気が乗らないし、当然のことながら、学力がつかない。特に算数が苦手である。よくよく聞いてみると、算数が嫌いなのではなくて、教えている先生が嫌いなのである。それからこの子は塾を変えた。習った算数の先生は70歳の年配のベテラン。喜んで、塾に行くようになった。当然成績が上がってきた。この子に言わせると、カッコええ先生だと両親に言っている。いろいろ聞いてみて、分析すると次のようなことがわかった。

1. 算数をユウモアをまじえておもしろく教える
2. 繰り返し、繰り返し教える

3. 算数は誰でもわかるからギブアップするなと言っている
4. 子供がどこで落ち込むかを知っている
5. 時に厳しく時間をかけてやらせる
6. 帰るとき、がんばったねと言って声をかけている

以上の6項目をただで子供的心をつかんだのである。

子供が変わるのは実はちょっとした教師の気配りと工夫である。コラム・連載2の教師の不人気の原因ワースト10を紹介しましたが、この先生はワースト10のどれにも該当していない。現役を退いてかなりたっているが、小学校5年にとっては かつこいいのである。生徒を魅了する第一はわかりやすい授業である。これが基本である。

授業がわかりやすくなければ、若かろうと、イケメンであろうと、ユウモアがあろうと、パフォーマンスをしようと、生徒をほめようと、近づこうと、何をしてもだめである。授業がわかりやすいから、ユウモアも、パフォーマンスも生きてくるのである。

まず、教える教科の商品化である。連載4で瀧山の英語の商品化を照会した。徹底した予習をすると、必ずその人独自の教え方 が目に見えてくる。市販の参考書を頼りにしたり、教科書の解答を頼りにしているようでは商品化はありえない。

手前ミソで申し訳ないが、今年度、全国の塾、 学校で「瀧山の9割は取れる究極のセンター対策英語」を講演しましたがたいそう好評でした。簡単に点が取れる商品化に成功したのである。そのために、過去 問を徹底分析した結果ある法則を見出した結果である。私の友人である日本史の横田伸敬先生、古典の荻野文子先生がこの商品化に成功したのである。

一般の先生はこの商品化はもちろん、生徒にとって、解りやすい工夫がない、スキルがない。教えることを生業にしている人は、解りやすい授業と商品化が不可欠である。政府の教育再生会議がすばらしい教育政策を打ち出したとしても、つまり手形を切っても、現場の教師が手形を落とせないのが現実である。コラム連載2で 照会した動機付けが商品化の次に重要となる。

動機付け・・・元気・活気・覇気・やる気・人気・勇気のでる授業

パフォーマンスとは：授業にパフォーマンスは必要だと考えている。いわゆるおもしろ、おかしくではない。教壇の前で演じることだ。声、表情、アクション、板書、語りかけ、アイコンタクト等外的要素と同時に、内的要素である教科書の中からネタを探し、生徒に興味ある話題と教科内容を結びつける工夫が必要である。教科書をシナリオにすることだ（コラム連載4参照）。また生徒の笑いを引き出すのも動機付けになる。面白い話をし続けると長続きはしない。笑いは緊張と緩和から出てくる。つまり真剣の授業とユーモアのある授業の繰り返しである。変化創出が笑いを作り出す。私は教科書にネタがないときは教科内容と結びつけた話を自分で作り出す。教師は俳優と同時に演出家でもある。わかりやすい授業の追求には大変な努力が要求される。私は教育をサービス 産業と考える視点を持っているので、何十年もの授業で飽いたことが一度もないと自信を持っていえる。

「教師は魂の演技者である」と再度いいたい。「勉強しろ？ 先生 あんたが 勉強せえ」

第10回 競争こそ生徒を伸ばす。再度詰め込み教育の大事さ。

最近、政府の教育再生会議をめぐって、野党の一部から、「大学入試をなくせ」とか「テストのための知識暗記や、詰め込み教育の受験競争自体問題である」という意見がある。私はそうは思わない。連載2で詰め込み教育の大事さを説いた、再度解りやすく説明しよう。全ての教科の基本的基礎知識は理屈なしに覚えることである。掛け算も覚えなくて、数学もくそもないのである。漢字、平仮名が出来なければ日本文が読めないのである。基本的な英単語が出来なければ、前に進まないのである。小学校、中学校の段階でこの基本的基礎知識を詰め込んでいないのである。高校ではもう遅いのである。生徒は詰め込んでほしいのである。問題は何を詰め込むかである。教える側がおもいきって詰め込んでいないし、解りやすく詰め込む工夫をしていない。言い換えれば手を抜いているのである。私は英語を教えているが、英語の出来ない生徒は、この詰め込みがないのと、本人の怠けである。なにも教育行政の欠陥であると仰々しくいう問題ではない。勉強の出来る子は一生懸命にやっているのである。勉強の出来ない子は一生懸命にやっていないのである。ただそれだけである。

先日朝日新聞にも紹介している、遠山真学塾を主宰している小笠先生の書いた「教えてみよう算数」は障害を持つ子供たちの為の算数を教える指導法の解説本です。対象の生徒はダウン症や自閉症、学習障害を持つ子供たちです。先生はこの子供たちに「わかる算数」を工夫して、粘り強く教え、発達障害の子供たちが通常学級の中にいる意味が増すと説いている。まさしく、「出来る子」ではなく「わかる子」を目指している。連載1で述べたが、一人一人に合う「わかる教科書」の自主編成である。私の言う連載4の「教科書の商品化」である。小笠先生は「わかる」ことにこだわっている。わからず工夫はなんぼでもある。この先生の本を読むとヒントは何ぼでもある。自分で「わかる授業」が思いつかなければ、「真似よ」といいたい。

ある高校三年生のAさんに会った。この女生徒は一学期の段階でクラス最下位である。私が会って話しをしてみると、基礎力がないことがわかった。とにかく大学受験を考えないで、一学期は受験科目の基礎を徹底的に勉強するように基礎の内容と勉強の仕方を指示した。成績が伸びだしたのは2学期の後半になってからだ。真面目に、こつこつと手を抜かないでやりぬいた。そして、自分と競争したのである。結果、この春県立大学に合格したのである。粘り勝ちである。真面目勝ちである。

この女学生はこんなことを言っている「県立大学に合格したことはもちろん嬉しいけど、失敗ばかりしてきた自分でもやり通したことが嬉しい」と。涙の勝利である。

どうやら議員さんや教育エリートさんは言葉が先行しているようだ。競争というと悪いイメージがあるが、そうではない。子供たちにルールを守らせ、正々堂々と戦わせること

によって、じぶんの長所、欠点を自ら見つけさすことである。競争はだめだというなら、じゃあどうして将来を保証するのか言いたい。正義？の言葉だけが先行しているのである。失敗することで、くやしさを、劣等感、しんどさ、情けなさを体験するのである。まさしく挫折を経験するのである。挫折の経験をしたことのない人間に人の悲しさがわかるのか。挫折も教育である。そしてそれを支えるのが教師であり、親であり、我々大人と違うのか。

だから、中学入試に失敗したAさんが這い上がったのである。

全国の学校、塾長、塾講師にこれだけは言っておきたい。

瀧山敏郎の話にならん20ヶ条「劣敗の必然性」

1. 目標、理念がない。「どんな学校、塾にするんや」。特に中堅以下の私立学校は公立学校の下請け会社になっている。欧米は プライベートというだけで名門である。
2. ルールがない。トップに指導力がないから教師のやりたい放題。業務命令は憲法だ。正しいか、間違っているかではない。学校・塾で働く3ヶ条 1. その職場を正しく変える力を持って 2. その変える力がないなら黙って聞け 3. 辞める
3. 協力、強調がない。私立学校、塾は人事の交流がないため同じ船のっているという意識がないと沈んでしまう。公立は人事の異動があるため人心一新ができるが、私立はない。しかし危機に直面すると、一致団結する強さが私立にはある。
4. 不平、不満、愚痴を言う前に何ぼでもすることがあるやろ。条件闘争、賃金闘争しかない。生徒の条件闘争をしたことあるのか。
5. 塾・学校は何を売ってるんや。解ってない。抽象的教育を売ってるんじゃない。
6. 仏さんでは改革できない。自分のための人気取りをするな。
7. 「共存共栄」アホちゃうか。「強存強栄」や。強いものが必ず勝つわけはいい。勝ったから強くなったのである。実は弱かった。
8. 能力と肩書きがまるで違う。有名国立、私立大学出身を前面に出し、自己主張をし、何の工夫もない授業。悪いのは生徒だといっってはばからない教師。
9. 負けは内的要因。外的要因ではない。責任はわれにあり。
10. 一人は皆のため、皆は一人のためがない。
11. 勉強しない教師はされ。Teacher's manualに頼っている教師が多い。
12. 下手な授業、営業が多すぎる。スキルを磨け。
13. 礼節がない。教育に携わっている人ほど「社会性、社交性」がない。学校の常識は社会の非常識。
14. 挨拶も言えない奴は去れ。生徒には挨拶を強要するが教師がしない。
15. 生徒が減れば自分にも跳ね返る。どの面さげて金もらう。特に、私立学校の教員は生徒は勝手に集まると思っている。公立全入時代が来るぞ！
16. ぬるま湯集団・相互不信集団・不満集団。自分も悪い。
17. 感性の鈍い奴は通用せん。塾・学校はサービス産業、人間関連業。

18. その組織の発展はその組織の長の器量を超えて発展しない。ミスマッチのトップ・校長が多い。教育畑出身の校長の時代じゃない。
19. 制度、システムがない。問題によってその時その時バラバラ。学校ほどシステム、デジタル管理がない。
20. 生徒を大事にしていない。叱ることも、直すこともしない。授業はゼロ、管理能力ゼロ。

第11回 教壇に未完成の教師を立たすな！

教師塾の意義とその実績！

今から17年前に、私は初めて教師の塾を東京で開催した。仲間の荻野、横田両先生と共に。おそらく日本で個人で作ったのは初めてであろう。動機はあまりにもひどい教師の現状をみかねて、恐れながら教師を鍛えようと思い立ったのである。中央大学の教室を借りて、集まったのが30名ほどである。よく集まったと思う。彼らは第一期生である。

それから17年、当教師塾で学んだ生徒（教師）は約1600名である。対象生徒は現職の小、中、高の教師、塾、予備校の教師である。彼らは驚くほど真面目であるが、驚くほど教師として素人である。生徒の前に立つにはほど遠い代物であった。

1. 専門教科に対する知識が浅すぎる
2. 教えるテクニック・スキルがない
3. 生徒に対するmotivation（動機付け）がない
4. 入試に対する分析がない
5. 塾ジャーナルの連載 3から連載7まで私が言ってることがまるっきり出来てない。

等々である。ここで実際指導した問題点をいくつか挙げてみよう。プロ教師から見た素人教師の問題点（全国100箇所での教師塾の実体験から）参加している生徒（先生）は大手塾、進学校出身が多い。

1. 板書が下手。尻を生徒にむけたまま、だまったまま黙々と書いている。その間5分。教材を見ながら板書している。
2. むやみやたらに当てる、時間稼ぎである。（生徒にあてて、答えさす原則は：a. 必ず正答を皆が答えるのを期待する時。答えてられて当然と安心さすこと b. 皆が答えられないことを期待する時。答えられなくて当然と安心さすこと、それだけ難しいことを認識さす）
3. 授業の冒頭に無駄口が多い。なかなか授業に入らない。生徒がいらいらしている。先生の説教と自慢話。
4. シャベってばかりで板書しない。（塾ジャーナル連載7の記憶保持率ができない）
5. 重要箇所の説明が一回だけ、繰り返して知識の定着をはかっていない
6. 喋りが早すぎて理解しにくい、声に強弱がなく、話の間がない

7. ええっと、あの～、ねね、まあその～という言葉グセがおおくて何を言ってるのかよくわからない。喋りが言葉グセで分断されるため、説明が非常に聞き苦しい。
8. 予習不足からくる、授業の質の低さ。答えしか言わない
9. 一つの問題に時間を多くかけすぎて、前に進まない。年間の授業の組み立てが出来てない。おそらく教科書は終わらない。受験に関してはプロといわれる教師は「切る」ことを知っている。こんなことは学ばなくていいと言って「切る」には、よほど自信がなくては切れない。つまり受験情報、分析ができていのである。
10. 「数学や英語が難しくない、勉強が難しいのである」ということを認識していない。

教え方の工夫やスキルが幼稚である。提言外部の講師、内部の教師の縄張り争いをしてい時代ではない。プロ講師を招いて、塾、学校内で研修会を長たる者が企画する努力をすべきだ。人の前にたって教えるという、しかも将来を嘱望されている若い人を育てるとい恐ろしい使命を担っている「教師」が未完成である。

公立では教育委員会、私立では経営者・ 学校長が塾長が採用する時点で、「教える」という基本条件を教えてないのである。専門教科の知識のチェック、教授法、スキル、生徒の管理能力、人間性等々 にも教えていない。もっと言うなら、教育委員会も学校長も塾長も実は何も知らないのである。

この未完成な教師（もちろんすばらしい教師はいるがその数は 経験上少ない）にまかせっきりでである。生徒に学力はおろか人間力につけられないのだ。将来と命を預けている父母はたまったものではない。パイロットが何の 訓練もないしに操縦させられるのか。

この際外部の力を借りても改革に乗り出すべきである。政府でも各省庁でも民間の力をかりた有識者諮問委員会がある。結果論、生徒の学力が伸び、教師の質がよくなり、学校が健全経営が出来ればいいのである。

今なら間に合うのである。第三者効果の力を借りる べきである。学校内予備校を始めてまる4年たつ。学校にプロの講師を派遣し、進学実績を上げることが最大の目的のために設立した。教えることから現役を去って、プロモーターとして、ディレクターとして、学校、塾の経営にかかわってきた。

中堅もしくは中堅以下の学校、主に高等学校の現状は進学に関してはなんの手も打っていないのが現状である。また手を打っていても結果を出していない。相変 わらず、公立の下請けのままである。専願の生徒が少なく（学校によっては300名の定員に専願が数名の学校もある）、併願の生徒が圧倒的である。公立の合 否次第で、その年の生徒数が決まるのである。重病なのはこれを当たり前のように容認しているのである。また同じように重病なのは、自前の教師で進学実績を 出そうとがんばってる学校もある。しかしである、創立80年の歴史を持っている学校で国立、名門私立に一名も合格させたことがない教師集団でどうして実績 を出せるだろうか。

これらの学校の教師、校長、理事長の体質は：

1. 進学に対するシステムを持っていないし、研究もしていない。校長は教師にがんばれ、がんばれの連呼しかしていない
2. 教師に学力がないし、受験のノウハウがない

3. 情熱がない
4. 経営者は新入生を何でも入学許可している
5. 問題児をかかえていて、生活指導が基本的に出来ていないし、中退する生徒が多い
6. 教師集団、経営者が相互不信集団である
7. 校長命令でプロが入ると教師集団が村八分をするいじめ集団になっている。

中堅、中堅以下の高校で成功した学校は：

1. 経営者に絶対的な力がある。
2. 教師集団が協力的であり、教師側に学ぶ姿勢がある
3. 生徒にやる気を起こさせるカリキュラムを組んでいる
4. プロ講師も学校の教師も進学に向けたモチベーションを生徒に洗脳している

タキヤマグループの中堅高校に対する、この3年の実績：同志社、立命、関大、関学、早稲田、明治、中央、法政、大阪市立大、大阪府立大、東北大、北海道大、弘前大その他国、公立大。この実績をだした学校の多大な協力と辛抱強さは賞賛に値する。そして、これらの中堅高校はこれから名門の道を歩んでいくであろう。キャッチコピー：1. 今なら間に合う教師の教育を！ 2. 健全経営は生徒の数ではない、質である！ 3. 公立高校の下請けになるな！

第12回 入試で、なぜ点を取ることが出来ないのか

学力向上という言葉が新聞紙上でよくみられる。学力向上という言葉は非常に抽象的である。なにを指して学力向上、学力低下といえるのか。改めて問いたい。子供にとっては、大人の議論なんてどうでもいい。教育再生なんて言葉だけ先行して、生徒にとっての議論ではない。子供にとっては、「どうしたら点が取れるのか」が一番の関心事なのである。

学力低下の要因の一つに最低必要な知識を詰め込んでいないのである。子供は詰め込みを決して嫌がっていないのである。問題は教師の詰め込み方にある。何の工夫もしていないといっても過言ではない。日本の公教育の最大の問題点は、「禁止」と「命令」を武器にしてきたことだ。子供にやる気を起こさせる勉強も、スキルもないのである。学力低下を言う前に教師達の学力低下を問題視したほうがよいのでは。

学力を論じるとき顕著に現れるのは入学試験である。この入学試験を突破して初めて学力の証明になる。学校によってすごい格差がある。学内試験など無意味である。

もともと私は全ての生徒は点が取れると信じている。

■ 「なぜ点が取れないのか」

1. 学校だけの勉強ですませていないか。

学校の勉強は入試に適した教材で教えていない。難関大学の英語の入試問題は原書、又は原書に近い。一方学校の教科書はRetold（書き直された）されたやさしいものになっているのである。いわゆる実践の英語に慣れ、親しんでいないのである。実力がつくわけではないのである。学校のお勉強は基礎中心である。高度な知識は見込めない。基礎学力は確かに大事だが、基礎学力だけではより優秀な学校には合格できない。

2. 入試傾向をつかんでいない。

最近東北の県立高等学校の'07年度の問題を入手してわかったことがある。平均点30.2（100点満点）だった。なんとも低い点ではないか。他の4教科は全て平均点50点を超えている。問題を作る教育委員会にも大きな責任がある。公立中学で習っている範囲で作問をすべきであるのに、逸脱している。しかも一番問題なのは、問題の出し方である。大学入試の問題の出し方をしている。おそらく中学ではやっていない未知の問題の出し方である。たとえば、ある単語をつかって、字数を制限して自由英作文を作らす問題である。無回答が50%超えているのである。異常としか言いようがない。

一方、塾はここで差別化をはかって、この問題の攻略法を図るべきである。要するに、問題に対する訓練をどれだけするかである。擬似問題を作ってどれだけ慣れさすかである。簡単である。

ちなみにこの夏にこのことで、中学3年生対象の講演にあって、効果的な実験をしてくるつもりだ。

3. 知識はあるが、問題の出方をまったくつかんでいない。結果応用力がつかない。

知識が豊富にあったとしても点につながるとはかぎらない。知識は料理で言うなら材料である。その材料を使ってどのように料理にするかである。材料は原形をとどめていない場合が多い。知識を即問う問題は出ないのである。次の単語を訳しなさいというばかげた問題は出ないのである。

一つの知識がどんな問題形式に変わるのかを教える側が熟知しておかなければならない。

（私は入試英語が専門なので）英語で言うと、一つの単語が広がる問題のパターンは、
1. 整除問題 2. 四択問題 3. 条件英作文問題 4. 同意語選択問題等である。「君は応用力がない」と生徒に言う教師がいるが、応用問題が作れない能力のない教師の発言だ。

4. 入試に出ないところをやっている。

プロ教師は教える内容を切ることを知っている。私の知っている先生で、非常に真面目で、手をぬかないことで有名な予備校の先生がいる。しかし人気がないのである。細かいところを含めて全て教えるのである。全部が重要であるはずがない。内容を切るということは、出題傾向を熟知しているからこそ切れるのである。無駄を省いてこそプロである。

5. 量が圧倒的に少ない。

生きるために必要な最低の知識がいる。漢字、足し算、掛け算、英語の基本単語が決定的に不足している。今それすら教えていないのである。まして入試になると、話にならないくらい不足している。進学校、進学塾は、普通の公立校より、漢字、単語、数学の演習問題を2倍以上教えているのである。差がつくのは当たり前。私は「偏差で勝負するな、数で勝負せよ」といつている。

6. 基礎が出来ていない。

いったい何を指して基礎といっているのか？各教科の基礎をいってると枚挙にいとまがない。基礎の基準は小、中、高を通して学校の勉強が基礎と認定してもいいだろう。しかし、この基礎が出来ていないのである。教育の目標の最大は人格形成であることは言うまでもない。一方で、生徒にとって大きな関門は、関心事は受験である。受験の失敗で人格形成に大きな汚点を残す可能性がある。受験は避けて通れないのである。小学校では小4、中学校は中2、高等学校では高2で、学校で習う全てを終わるべきである。そして受験体制を作ってやることだ。最終学年になってから基礎をやっていては遅いのである。

7. 入試の準備の出発が遅い。

一般に進学校は入学したその日から受験である。高校で言うと、進学校は高1から受験体制、公立高校は8ヶ月である。太刀打ちできないのである。前述にも記したように、基礎を高1で終わってしまうのである。何もしないで、遊んでばかりいる生徒と真面目に一生懸命に勉強している生徒の差がついて当たり前。甲子園の野球などスポーツできるとやたらと新聞紙上で脚光を浴びる。勉強できることもかっこいいんだ。

8. 勉強する環境があるのか。

進学校の最大の利点は、周りが勉強する体制の生徒だけである。自分もしなければならぬ気持ちに勝手にさせてくれる。勉強すると白い目で見られる学校で教鞭を取ったことが私にもある。勉強する環境の第一は友人である。親が進学校に殺到するのはうなずける。第二は受験のプロが周りにいるかである。進学塾、進学校の教師は生徒が優秀だから手が抜けないのである。自ずと、プロにならざるを得ない。生徒が教師を育てる構図になっている。進学校のダメ教師は生徒が審判を下す。賢い生徒、賢い親がいる。

9. 本人のやる気・・・よって、たかって皆で支えよ。

もちろんやる気を起こさせるのもプロの教師の勤めである。最後の最後は本人のクソ度胸である。このクソ度胸はどこから来るか？私は家庭環境といたい。特に親父の存

在である。親父とお袋の役割分担をはっきりさせること。「父よ、言いたいことがあれば、はっきりいえ、母よ言いたいことがあってもはっきり言うな」である。子供は無限の力を持っている。それを引き出すのが我々大人、教師の責務である。どんな手を使ってでも力をつけることだ。子供たちが将来、社会貢献、人助けの人間になってくれたとき、我々親、大人、教師が生徒に勝ったことになる。

キャッチコピー：

1. 生徒の学力低下より教師の学力低下こそ問題だ！
2. ガリ勉歓迎、勉強できることはかっこいいんだ！

第13回 緊急提案「1ヶ月完成、今からでも間に合う瀧山の9割は取れる究極のセンター対策、英語編」センター入試の商品化とは！

センター入試の高得点は1. テクニック 2. 資料 3. 訓練でかならず取れる。全国の英語教師諸君！センター英語はある種のテクニックを使うことと、資料を整えてやることで生徒のセンター英語に対する負担がずっと軽くなるし、高得点につながる。私は以前から商品化の話がこの誌上を借りて、主張して来ました。また前号9月号の主張『入試で、なぜ点を取ることが出来ないのか』を具現化したものとして、直前に迫った'08年センター対策を商品化してみました。

瀧山のセンターリスニング対策（30分50点）50万人で平均点は32.47だから問題としてはやさしいといえる。40点は取らなければ差別化はない。

リスニングの訓練：

1. 教材のネイティブの英語を聴きながら、教材の英文を見る
 2. 教材のネイティブの英語を聴きながら教材の英文を読む
 3. 教材を見ないで耳だけで聴く
 4. 単語をひろい読みしながら意味をとる訓練をする
 5. 速読（前から訳すとばし訳）と同じ手法で耳で聴く訓練、
- 以上 5パターンを何回も繰り返して耳に定着さす。

教材・・・NHKラジオ「徹底トレーニング英会話」、英検2級、モノローグの英文を英書書店でなら手に入る。

対話文イラスト選択問題・・・全体的にやさしい。以下のことに注意。

事前に質問とイラスト・数字・文字に目を通しておくこと。

1. 特に数字が出たら、足し算、引き算、割り算、掛け算を予測しておくこと。

2. 位置、場所を問う問題
3. 特にイラストと文字はどれを選択するかを問うている質問の英文を予測すること。

第2問 対話文応答完成問題・・・場面の状況がわかっているかを問う問題。

1. 読み上げられた最後の英文に神経を集中
2. 平叙文で終わった場合はごく自然な文の流れの内容を選ぶこと。正答以外はまったく関係のない英文なので案外やさしい。
3. 聞き取りは文法を無視して、単語を追え。上記でいった教材で、耳で単語を追って、意味をとる訓練を一ヶ月一日15分やればかなりな受験のヒアリングは出来る。
4. 事前に質問と選択肢に目を通しておくこと。
5. 入試に出る典型的な英会話表現をマスターしておくこと（瀧山の入試に出る英会話表現）

第3問A 対話文質問問題・・・場面状況を問う問題、疑問詞で始まる問いで、予測しやすい。

1. 事前に質問と選択肢を見ておくと、読み上げられる英文の内容がつかみやすい。
2. 疑問詞で問う問題、Where, How, What, Whenを知っておくと選択肢は簡単

第3問B 会話文図表問題・・・これこそ事前に問いと選択肢を見ておくと、読み上げられた前半の会話文は回答に関係がないことがわかる。

1. 時間と位置が問われる
2. 副詞・形容詞の最上級に注意
3. 位置を表す前置詞に注意。 on, over, above, beneath, under, below

第4問A 短文内容把握問題・・・全問にいえることだが、事前に必ず、質問と選択肢を見ておくこと。そうすれば、読み上げられる英文のどこが解答に直結するか簡単にわかる。

1. 時間
2. 数字（‘07は数字と色の組み合わせの選択）
3. 起こった事実

第4問B 長文内容把握問題・・・内容が難しい出題が予想される。受験生が一番苦手なジャンルの問題である。事前に質問と選択肢を見ておくことはもちろんのこと、それだけでは対策にならない。モノローグの英文を探して、訓練しておくことだ。

進学校では教師がこのモノローグの英文を生徒に与えている。モノローグの英文でヒアリングの訓練をしないと英会話の訓練では短期間勝負に勝てない。この英文をもっと早く聞く、倍速訓練と同時に口頭で練習する“シャドーイング”訓練がよい。口に出して、大きな声で英文を普段から読むことが必要である。

本試験は07年度から一部問題の傾向が変わったことに注目。当分この変わったままで3年は出題されるだろう。最初が変わった問題を指摘しておこう。

第一問のBの文強勢問題から発話の強調意図問題に。第3問の語句補充問題から意味類推問題に。文整除問題から発言主旨把握問題に。

第1問

A 発音問題・・・

子音、母音の典型的な問題である。たいした準備をしなくても学校の教科書に出てくる程度の単語から出ている。特に子音では、ss,gh,ch,ph,th,se,ger、母音では、ou,oo,oa,ea,l,au,ear,o,に注意。しかし、ほとんどは常識問題である。声に出して読む癖を身につけておこう。この問題で差がつくことはない。

B アクセント問題・・・

一番定番の私立国立問わず出題される。アクセント問題は3音節以上の語が集中的に出題されている。1. 瀧山のアクセント21公式。 2. 瀧山の的中、発音・アクセント語。 3. 頻出カタカナ英語。これで発音・アクセント問題は充分対応が出来る。後はほとんど常識問題である。

C 強調意図問題

強調されている語を的確に捉えていれば答えは簡単。どんな語が強調されるかあらかじめ知っておこう。代名詞、疑問詞、副詞、時としてbe動詞等が狙われる。代名詞・be動詞は対比がポイント。疑問詞は強調されている内容に注目。副詞は感情表す内容（喜怒哀楽）を問うている。

第2問

A 4択問題は次の5ジャンルから頻出

1. 語法 2. 文法（仮定法、比較、時制、否定、動名詞、不定詞、分詞、前置詞+関係代名詞） 3. 熟語（基本動詞の派生熟語） 4. 副詞、接続詞（逆説、順接、追加、例の内容を問う問題） 5. 語い力（難単語は出題されていない。センターなら試単2000ぐらいだろう）

教師側はこれだけの資料を早急に準備し、授業で実証してみることが絶対不可欠。プロの教師ならやってみろ！

B 対話文空所補充問題・・・

1. 入試頻出英会話表現を知っておく必要あり

2. 空所の前後、特に後にヒントあり
3. 代名詞の利用
4. 消去法の利用

C 語句整序問題・・・

語法、熟語、構文、文法から出題されている。もちろん知っていれば、解答はすぐだ。進学校の生徒はおそらく完璧にマスターしているだろう。私が対象としている生徒は英語が苦手な生徒諸君である。その生徒向け攻略法は次の3つである。1. 組み合わせ 2. 消去 3. 基本的文法思考。大事なものはこの3つを用いて実証することである。（この誌上では説明が困難である。実証授業の希望があれば、問い合わせをしてください）

第3問

A 意味類推問題 '07から導入されたあたらしい問題である。本文の英文は中学3年生なみだが、下線部の語、文は難解な英文である。しかし、文の流れが解れば、答えは出てくる。出題されるジャンルは英会話表現と難単語の2ジャンルから出ている。もし、英会話表現をあらかじめ知っていたら、秒単位で解ける。

B 発言者内容把握問題・・・英文は簡単。文の主旨を読み取れば簡単に答えが出てくる。時間をかけるな。速読で意味をつかめ。ポイント：全体的に後半の文に答えあり。特に、副詞、接続詞の逆説の後の文に発言者の主旨がある。

C 文補充4択問題・・・空所に文を入れて、意味が通るようにする問題である。空所の前後の文と空所に入れる文には共通語、共通内容がある。数字（足し算、引き算、割り算、数字の流れ）、代名詞が何を指しているか。それを探せ。

第4問 ビジュアル読解・・・毎年出題される内容は数字を問う問題である。とにかく数字が出れば、そこを濃い鉛筆でマークせよ。事実の記述、特に、否定、肯定、類似、違い、高い、低い、多い、少ないの英文の箇所注目せよ。そこから出題されている。

第5問 会話形式ビジュアル問題・・・それほど難度のある問題ではない。じっくり読めば簡単。（ ）に入れる問題は、英会話表現が要る。例えば、'06年の選択肢の Oh, give me a break.の意味を知っていると、知らないとは解答の速度がちがう。知らないと文全体を読んで、類推しなければならないのである。また、狙われる英文の箇所は：1. 事実の箇所（事実の箇所とは、抽象的・描写的な表現ではないところ。否定のところ、肯定のところ、はっきりとした事実） 2. 場所 3. 時 4. 形 5. 色

第6問 長文読解内容一致問題・・・Aの問題は本文の事実の箇所からと全文の文意から出題されている。Bの問題は内容一致を問う問題である。これも毎年否定の箇所が一番多く狙われている。両問題にとって何よりも大事なことは速読できるかということである。全体の問題の解答時間は80分である。そして、第6問は配点が43点と一番多いの

で、ここで落とすと、ハイ得点が見込まれない。速解とはどの箇所から出題されているかである。これは上記にすでに言っている。問題は速読である。ここで瀧山の速読法を紹介する。速読（早く読む）なんてことは、日本人には無理である。早く読むこの言葉自体さっぱり理解できない。私は、速読＝とばし訳だと思っている。訳さなくていいところは訳さないことだ。英会話のヒアリングがそうだ。全部聴こうとするから、しゃべっている速度についていけないのである。

瀧山の訳すな英語10ヶ条・・・コツは文法を無視して、単語をつまんで前から訳す、つまりピック・アップ方式である。それに訳すな英語の法則をくわえたものが瀧山のとばし訳である。

1. 形容詞（句、節）は訳さない（形容詞が補語の場合は除く）
2. 副詞（句）は訳さない
3. 挿入句は訳さない（下線を引いて問われている場合除く）
4. 動詞（意味が解らないとき）+to do,動詞（意味が解らないとき）+doingはto do, doingを訳せ。動詞が否定されている場合はto do, doing を否定して訳せ
5. 動詞（意味が解らないとき）+前置詞を効果的に訳せ
6. A and Bはどちらか一方を訳せ
7. A of BはBを訳せ。
8. イントロ文は訳すな。（イントロ文とは、It is~thatの主に仮主語構文）但し、イントロ文に否定語あれば、that以下の文の動詞を否定すればいい。
- 9.同格は後ろの文を訳して、前の文を訳す な。
同格になる語、記号： that is (to say), in other words, 一、：、；
10. 非常に訳しにくい文は無理に訳すな。

重要1：国立2次問題、難関私立大の問題はテクニックだけでは点が取れない。一方センター英語はテクニックで点が取れると部分が多い。9割とるには、上記の私の提案に従って、具体的な問題を通して実証してみることが不可決である。過去問を出来るだけ多くやらせることだ。また、答えから逆算して問題を見てみると出題の意図と特に長文のどこが狙われるかがわかる。昨年、学校と塾で、私がこのセンター問題を実証してみました。反響は相当なもので、ほとんどの生徒は聞く前と聞いた後でのセンターの取り組みがまったく変わり、本番でかなりな高得点を取ったと報告が多数ありました。なんのテクニックも知らずに本番にのぞんだ生徒と一定のテクニックを教えられて本番に臨んだ生徒にはかなりな差が見られた。瀧山受験教育研究所では、短期、一年の期間で洗練されたプロ講師を塾、学校に派遣しています。お問い合わせください。

重要2：生徒では集めにくい資料を準備してやること。センターで必要な資料： 1. 発音・アクセント公式・頻出アクセント 2. 頻出カタカナ英語 3. 瀧山の入試頻出英

会話表現（文法を中心とする問題が減り、口語コミュニケーションを中心とする問題が増えた。これは今後とも続くと思われる、また国立の2次対策、難関私立大学もこの英会話表現がより重視されると思われる） 4. 瀧山の入試頻出語法 5. 瀧山の基本動詞の派生熟語

第14回 アホか！大学合格実績上乘せ

大阪学芸高校（大阪市住吉区）は優秀な一人の生徒に73学部を受けさせその実績を上げさせていた。梅花高校（大阪府豊中市）は生徒5人に213学部を受けさせ139に合格していた。インチキ高校の情けない話である。しかし、ほとんどの中堅以下の高校は日常茶飯事的にこの類のことをやっているのである。生徒の頭数でなくて、延べ人数で発表し、現役受験生と浪人生を合わせて、現役生が合格したように見せかけている高校は5万とある。校長も教師もこれを当たり前のように容認している。組織ぐるみの改ざんであり、犯罪である。このインチキの合格実績を中学校に堂々と示しているのである。自校の校舎に大きな垂れ幕をたらし、このインチキの数字を世間に公表しているのである。教育的良心のかけらもない。こんな学校はつぶれたほうがいい。

こんな学校に限って教師の学力低下ひどいものである。最近の名門の私立高校は採用試験を実施しているようだが、中堅以下のひどい学校は採用試験をしていないところが多い。理事長、校長、教頭の知り合いの縁故採用が圧倒的である。残念ながら、公立の教員の学力とは比べものにならないのである。一度全教員を辞めさせ、学力テストをした上で採用したほうがいい。

私はかつてある超底辺の高校に招かれて、再建策はないかと相談を受けたことがある。集まった理事長、校長、副校長、教頭、教務主任、進路指導主任等総勢10人ぐらいだったと思う。冒頭理事長が「この学校の再生のための先生の意見を聞きたい」と言った。私は即座に答えた「この私の前に座っている偉い人全員即やめたほうがいい」と。この極端なことをしないと、今のアホ私立学校は救えないのである。

一方塾は改ざんしにくいのである。生徒同士がよく知っているのである。唯一改ざんが出来るのは教場を多く持っている多店舗展開の塾にこの改ざんの可能性がある。塾が改ざんをやったらおしまいよ。

私は一貫して公立学校に対して民間教育（私立学校、塾）の重要性を説いてきた。にもかかわらず仲間内から裏切り者（改ざん学校）が出てきたのである。私はコラム連載1で「話にならん経営者・話にならん教師」を提言した。再度経営者、校長、教師、講師に提言したい。

【私立学校経営者の大問題点】 経営者に理念がない・・・「公教育との差別化は進学実績・躰」 進学実績は改ざんしなくても合格できる成績が上げられる。短期、中期、長期の5年で完成する。

1. 目標大学の設定
2. 無駄をはぶいたカリキュラム
3. 受験プロによる教科書の選定

4. 自校の教師と外部の受験プロ講師の連携と役割
5. プロ講師による目標大学の受験問題の分析。
6. 生徒個人の特性と希望 大学のしぼりこみ
7. 生徒をバックアップするチューター制度の確立
8. 週一回の情報・成績・到達度・勉強態度の交換会議。

このことをしつこくやることだ。当たり前のことを当たり前に行っていないのである。現名門私立高校のほとんどはかつては誰も行かない底辺校であった。

典型的な例は京都の東寺高校、現在の洛南高校である。経営者の理念、姿勢が全てを決める。今や洛南高校は社会に優秀な人材を多く排出しているのである。

また、進学実績のない学校ほど躰がなっていない。茶髪、服装の乱れ、化粧、だらしない靴の履き方等いくらでもある。ある私立女子高校の入学式の光景：茶髪とパーマー、靴を踏んづけて親と式に参加。親も親である、注意をしない。しかも厳粛な入学式にもかかわらずしゃべりっぱなし。この学校の1年間の退学者は30人に達し、校則を守らない生徒の別室指導は一クラス分を超えるのである。こんな生徒を入学許可した学校側に問題がある。

トップが教師に生活指導を徹底して命令していないのである。同時に教師も生徒を怖がっておもいきった指導が出来ていない。叱らない先生がいい先生と勘違いしている生徒がおり、教師がそれに迎合しているのが実態である。経営のためには何でも入学させる。掃き溜めの学校になっているのである。こんな学校にかぎって生徒が守らない立派な？校訓がある。わけのわからん抽象的人間教育論をなんぼ生徒に校長が語ってもクソの役にも立たない。

他校との差別化は進学実績だけではなく「しつけ教育」も看板になる。絶対になる。東北のとある私立高等学校で、中堅の高校で、進学実績では地元の公立高校に軽く負けているのが実情である。とにかく挨拶がすばらしい。学校に来る業者をはじめどの来客者にも挨拶をするのである。地元の人たちに聞いてみると、地元の進学校に引けを取らないくらい、評判がいいのである。生徒数も安定して集めている。礼儀を買う親も多いのである。躰を教え込むのに理屈をいっていない。強制的にやらせているのである。

塾でも同じ話を聞く。「あの塾にいつてから子供が朝、夜におはよう、おやすみと挨拶するのでびっくりした」と親が出来てない躰を塾がやってくれたと感動している。「おはよう・いつてきます・ただいま・いただきます・おやすみ」と言えることのすばらしさを教えようではないか。私は強調していいたい、この挨拶の出来る子供たちは必ず100%成績が上がるとお約束する。先ず挨拶から差別化を。

【塾経営者の大問題点】

トップが講師、社員に弱腰である。辞められるのを怖がっている。トップのリーダーシップがない。人格的に失格。

社員教育、講師教育がまったく出来ていない。宣伝にしか金を使わない。教育費に金を使う経営者がいない。

塾講師の学力は公教育の教師に軽く負けている。力のある講師を採用出来ていない。採用できる人脈、ルートをトップがつかんでいない。

場当たり、無計画な塾展開、不透明な経営内容。そのために社員、講師の不信が授業に影響していて、生徒を大事にしない。

戦略がない。時流に乗っていない。他塾との差別化ノウハウがない。親対策、イベント対策、効果的な広告対策、営業対策がまったくない。

キャッチコピー 例1. 大学が名門になるには100年かかる。高校は5年で名門になる
例2. もう一つの差別化は躰である。躰で生徒を呼べる 例3. 勇気あるアホナ経営者は自ら去れ 例4. アホナ経営者よもうチャンスはない 例5. アホナ経営者にアホナ教師が集まる

第15回 【成功した塾・失敗した塾】 シリーズ1

ここに挙げる「成功した塾・失敗した塾」のモデルは小規模塾、中堅塾、大手塾のご意見と私の全国講演行脚の目で見たと集約された結果の結論である。

もともとと塾の語源は「門の脇の堂舎（建物）で子弟を教授する私設の学舎」の意である。ひっそりと、静かに、したたかに、厳しく、やさしく師と弟子が向かい合っ て、小さな堂舎の中で、村を、町を、国を、世界をどう見るか、どう変えるかを学び、大きな世界観を育む学び舎であった。そのためにどうしても知識が必要で あった。この哲学を達成するために日夜寝食を削って、知識をむさぼり習得したのである。

成功した塾・・・小規模塾：絶対変えてはいけない理念・哲学がある。補習塾なのか、進学塾なのか。神戸で補習塾に徹底した塾がある。周辺の生徒だけを対象 にし、学校の定期テスト対策を徹底している。補修、再テストを徹底することで、基礎学力の向上に力をいれている。この補修、再テストという勉学の行程は地味な粘り強いもので、生徒にとっては、同じことを繰り返す面白くない勉強のジャンルである。

この塾では、この行程を教える側が一步も引かない姿勢で最後まで やらす。いやがって辞めたらどうしようと思ったこともあるが、この寺子屋塾の指導方針を貫いている。一クラス定員最大18名に限定しているのは、目が行き届く限界だと考えている。

学校のテストは基礎学力テスト問題といって過言ではない。要するに、学校のテストに高得点を取らすことによって、自信をもたら し、次のステップに気持ちを高める作戦だ。現に、小学6年生は名門私立中学に、中学3年生は地元の進学校に希望者の4割は入学させている。しかし、あくま でも基礎学力に重点を置くことがこの塾の方針で変えない姿勢を貫いている。

ちなみにこの塾の小、中併せて生徒総数は120名である。講師は塾長と専任の講師1人、奥さんの3人である。授業料は周辺では高い。費用対効果では保護者は安いとの感想。現在入塾希望者が待機中である。塾激戦区でもある。塾長に、「塾人としての生きがいは」と聞いたところ、「教え子達と飲みながら、近況を語り、思い出話をする」と答えてくれた。実に明快ではないか。

難関大学進学を専門にやってきた私が常に思うことは、偏差値アップの最大の要因は基礎力である。問題は何をさして基礎力というかである。基礎学力の中身である。難関につながらなければ基礎学力とは言わない。

成功した塾・・・中堅塾：（500人から1000人の生徒数）。

1. トップに理念、哲学がある・・・最初は一教場で始まり、実績と信頼を得て、二教場といった具合に必ず成功がなければ次に展開しない。多店舗展開による収益を目的にしていないのである。
2. 徹底した教師の教育である。特に、地方の塾は人材の確保は非常に難しい。自前の教師を鍛えるしか方法がないのである。京都府下のある塾長は一ヶ月ごとに代わる講師に私が講演するたびに頭を悩ましていた。しかし、この塾長は教育しても駄目な教師を平気で切ってきた。そのため、塾長の授業は月曜から土曜日まで休みなしである。良質の授業を提供するために、人材開発と講師教育にかなりの予算を使ったのである。広告宣伝費より。特に、地元から大都会の大学にいて、そこで就職した人の故郷再生のためのカムバック組みをターゲットにして、粘り強い説得をした。そして現在は4教場を持つに至ったのである。生徒数700名
3. 生徒と親のニーズをこよなく追求。有名中学、有名高校の進学だけではなくて、生徒にあった学校選びを親、生徒と徹底的に話し合い進学先を決める面倒見のいい塾として地域に定着した。
4. 年間カリキュラムと教材：カリキュラムについては年間固定しないで、生徒の進路状況を見て、出来る生徒用の教材、出来ない生徒用の教材をあらかじめ年度当初に用意しておく。学力不足の要因は一定の知識を詰め込んでいない観点から、復習テストの繰り返しで知識量を増やし、同時に基礎学力をつける。教材は市販のものを使わないで、その地域の小学校、中学校、高等学校の教材を参考にして自主編成教科書を作成。また家庭学習のスケジュール表を渡して家庭での勉強法を学校の勉強を考慮して作成。
5. 活知識人：勉学以外に生きた知識人を目指して、新聞等を使って、社会の出来事、環境、世界の子供達、時に経済のことをわかりやすく写真等を使って提供。またこの時間を利用して、躰、挨拶、親子関係等の道德教育も押し付けがましくなく対話形式でやる。
6. イベント：外部からその道のプロを招いて、暗記の仕方、やる気を起こさせる各教科の勉強法といったイベントを親も参加しての勉強会の実施。

成功した塾・・・大手塾（1000人以上）

大手塾の経営者は元は小規模、中規模と経験を経てきた強みを持っている。生徒一人一人を大事にして小規模塾の理念、哲学を広められないかといって実現したのが最大手塾東京のAゼミナールである。

最近会ってお話をしましたが、いまだに代表から売り上げの話の聞いたことがない。子供にとって何が必要かを先ず考える。先日もセンターはテクニックで取れると私が言っ

たところ、すぐに事実上経営する私立高等学校にすぐに講演に言ってくれという要請を受けた。

私が聞いたおもしろいエピソードがある。それは、これだけ大きくなると（現在69000名）、あの手この手で売り込みに来る。入り口を閉めてしまえば、騙されることはないが、情報も入ってこない。入り口を開けておくと、情報も入ってくるが、騙されることもある。つまりこの塾の代表は「騙され予算」も致し方ないと断言した。

これだけ大きくなると数人のシンクタンクだけでは運営が出来ない。教育者、経営のプロ、マネージメントの出来るプロが必要になる。先生をつまみ図体は大きくなったが、このAゼミナールはいまだに小規模塾であるといいたい。金太郎飴である。どこを切っても同じ絵が出てくるそんな商品を提供している。すでに公教育の一端を担っているのである。 次回はこの大手塾が成功した手法を分析したい。

第16回【成功した大規模塾】シリーズ2

ここで言う成功した大規模塾は理想型ではないことを最初に断っておこう。「俗に言う成功した大規模塾」といっておこう。寺子屋式で成功した小規模塾は個人的には、私の中では腑に落ちる感覚を持っているが、大規模塾にするという決断は相当なものであろうと一方ではその英断に賛辞を送りたい。大規模塾の必須条件 人による求心力…トップの求心力が不可欠である。

東京の最大手塾Aゼミナールは現在生徒数推定69000人である。大規模塾にするという代表の決意が最初からあったとは思われない。大きくしたのじゃなくて大きくなったといったほうが正確であろう。このAゼミナールのトップは塾の理想型を小規模（800名）の時代から今日まで追及してきたといっていいたろう。30年前に5000名の塾生をあっさり人に譲り、新しく700名規模の生徒数で一からやり直した。彼の思想は「教育>経営」に徹したのである。寺子屋の延長線上に69000人があったと言える。

10人の成功した塾長に聞きました。その共通した6つの条件とは：

1. トップに人望・信頼・尊敬がある。
2. 目標・ビジョンがある
3. 計画性がある
4. 人材育成力がある
5. 制度・ルールがある。
6. 合格へのシステムがある

大規模塾の強み・組織の一例

学力向上のシステムの構築：小規模時代から着手しないと大規模にはならない。ある日突然に大規模になったわけではない。トップの目標・ビジョンがあつてこそである。講師力・システム力があるのが最善ではあるが、先ずシステム力である。講師力はシステムが

あってこそ標準化したサービス 品質管理ができるのである。寺子屋方式は講師力で充分持つが、その講師がいなくなれば寸時に崩壊するのである。第一私が見る限り、塾での優秀な講師はまず いない。ほとんどの塾は講師を教育するという考えはない。（学力向上のシステムは機会があればこの誌上で紹介したい）

役割、責任、権限を明確にした組織の構築

わずかな人数による戦略統括会議→グループ統括会議、CSR委員会、経営管理本部。

募集営業部…プロによる募集社員の教育の徹底。この時に必要なのは他塾との差別化商品の開発である。

開発・マーケティング部門の充実…Aゼミナールの成長要因の一つに市場の変化を早く捉えたマーケティング力がある。マーケティング力による、チェーンオペレーションの経営技術、広告のうまさ、資金（回転）力、合格を生み出す指導システム、プロパガンダ、塾独自の専門教材、熱心な保護者（信者）の獲得手法、カリスマ講師の獲得とその講師によるイベントの連発講演等

顧客サービス部…問い合わせの一括管理、クレームなどの相談も専門で受ける。この部署に来るクレームはほとんどが講師に対する 批判である。いわゆる不良商品である。この窓口から後に述べる「人材開発部」に講師採用基準のマニュアル作成の重要なヒアリングとなっている。大事なことはクレームを早期に解決することが退塾生を出さないことにつながる。ほとんどの塾は場当たりで、組織立って対応していない。新規の塾生を募集することも売る上げからいっても大事だが、もっと大事なことは退塾生を出さないことである。

人材開発・研修部…膨大な数の講師、その採用と管理、品質保持のための研修。講師一人一人の自主性と能力に任せるにはあまりにも膨大すぎる。研修のマニュアル化、つまりどこを切っても同じ絵が出てくる金太郎飴教本が必要である。

教務部…教材開発、カリキュラム管理、新指導システム開発、

進学情報部…進学情報、学校に対する宣伝・啓蒙、

人事部…幹部の育成と適材適所配置

財務部・経理部

コンプライアンス室…社会的責任と法的責任

物流部…塾内の物流など

システム管理部…IT関係等

その他、広告宣伝部、運営課、業務改革課、教室開発課、販売促進課等

以上のような組織を最初から整えていたわけではない。生徒の増加に比例して、計画的に、無駄なく設置していった。 大手塾の問題点…確かに組織は出来たが、この組織を動かすのは人である。これだけ大きくなるとほころびが出てくる。特に講師の資質である。システムは 出来たのであるが、それを活用する講師に力量がない。塾の評価は大手であろうと、中規模、小規模であろうと最終的には、合格実績である。つまり生徒の、親の満足度である。以上のような大規模組織は、いわば隠れた部分であって、表に出るのは先生である。これだけの講師を育てるのは不可能である。一定の教育は するが、実際は

講師任せであるのが現実である。その結果として、最近退塾生がかなりの数で増え続けている。ほころびが出てきたのである。 強者VS強者の時代…強者とは？

強者VS弱者の時代は90年代半ばから続き、現代は強者VS強者の時代に入った。どのような小さな町にも塾はある。塾のない町を探すのは不可能であろう。結構名の通った看板があちこちに見られる。場所に関するマーケティング力は役に立たない。差別化は塾が乱立しているところにこそ発揮されるのである。当たり前の補習塾、進学塾は絶対に大手塾には勝てないのである。教材+講師+システム=合格率である。どんな教材であるか、どんな講師であるか、どんなシステムであるかを追及することが勝者になれるのである。大手の合格率にはまやかしかがある。1万人の生徒数の合格率と500人の生徒数の合格率同じなら、明らかに500人塾の合格率は群を抜いているのである。強者VS強者の時代だからこそ、こだわりのある小規模塾に勝機があるかもよ。強者VS強者の時代は成功の条件というよりも生き残りの条件であろう。教室の利益率がどんどん下がっている。教室がなく利益率が上がれば強者と言える未来の商品、おもしろいweb授業やeラーニング思考もその一つといえる。

第17回 失敗した塾総集編：その1 《講師編》

私は基本的には、公教育と対峙できない塾は自然淘汰してなくなったほうがいいと思う。最近の公立中学、高校の教師はかつての教育論を振り回す型の理論派が少なくなってきたといえる。むしろ塾型の教えるプロ思考が増えてきた。これは塾にとって脅威である。そう遠くない時期に公立学校の教員に受験というテリトリーを明け渡すことになるのは目に見えている。

かつて受験分野では塾・予備校が公立校に一步も二歩もリードしていた。公立高校を辞めて、予備校に講師としていくことが名誉だった。塾もしかりで、こと受験に関しては情報を集め分析もし、全てにこだわっていた。それが利益最優先にした結果安もんの講師を使い始めてレベルが年々落ちてしまっている。

最近生徒向けのイベント講演「なんで点が取れないのか」をやったところ塾でそんなことを教えてもらってない、学校で教えてもらったという生徒諸君がかなりいたのには驚かされた。塾でこんな会話が飛び交ってること自体末期的である。

塾の原点は長屋の奥でひっそりとこだわりを持って、子供が好きな先生がやっていたのである。先生は退職した教師、途中でリタイアした教師達であった。聖職意識を持った超アナログで、何よりも躰を大事にして、自分の持っている知識を伝達する、いわば文化の伝承と言っても過言ではない。今のよう に精神的にも未熟な学生が教えるなんてとんでもないことであった。どこかの老舗の料理屋のように、一度出した料理を手がつけなければ、次の客に出すと いうなんの倫理も哲学もない商売がまかりとおる世の中である。塾もしかりである。

将来ある子供を預かる商売である。授業内容も、教科書も、教師も、カリキュラムも、学力向上も何の計画もない。ただ生徒を集めるだけ。衛星放送授業に頼るだけ。駄目塾に共通している講師の劣敗の必然性

1. 下手な授業が多すぎる。塾の講師でもやろかという、まず意気込み、使命感がない。
【最悪の3マン】 1. マンネリ（惰性） 2. 慢心（自惚れ） 3. 怠慢（怠け） 実力のない講師にかぎってこの傾向が強い。講師、教師に共通することは、社会性がまったく欠如している。ちなみに、教師を辞めて、予備校に再就職して成功した人は、私の周りで見ることがない。また教師ほど教師をやめて、社会で通用しない職種はないのである。学校の常識は社会の非常識である。
2. 成績を上げるカリキュラムがない。だだの時間割表であって、カリキュラムではない。年間を通しての学力アップのスケジュールがない。
3. 賞味期限の切れた講師と専門職としての知識がない新人講師。特に地方では講師難の為、少々悪いと経営者が認識していても採用しているのが現状である。地方でもまじな塾は学力テストを行っているが、ほとんどの塾は採用に学力テストを行っていない。またその教師の研修会もやっていない。宣伝費はかなりの額を使うが、塾講師の研修費にまったく使っていない塾がほとんどである。（ベテランがそろって群がる 養老塾）
4. 利益率を上げるために安物の学生講師にまかせっきりである。その学生を訓練すらしていない。学生講師の問題点…学力と教えることはまったく違うのである。利益優先のために使う学生の講師がなぜ駄目なのか。彼らは教えるというtechniqueも、presentationも、motivationもまったくないと言っていいだろう。たまたまいい学生講師が来るが、あくまでたまたまで、博打のようなものである。生徒のお金は親の浄財である。どんな学生講師であるか、見たこともない経営者は親の浄財をなんと考えているのか。何よりもなっとらんのは子供たちの気持ちをまったく考えない自分よがりの独断と偏見で教えている恐ろしい現実がある。人の前に立ってはいけない、我儘の素人である。かつて京都の塾で学生の殺人事件があったのは何も偶然ではない。起こるべきして起こったのである。学力のない学生にいたっては悲惨である。全国講演で、そんな学生講師を私は多数見てきた。力のある子供の能力を引き出せず、学力の遅れている子供をもっと遅らせているのである。
5. 賞味期限の切れた講師と専門職としての知識がない新人講師。特に地方では講師難のため、少々能力、生徒の管理能力不足でも、採用している。時間割から見て、教師が足りないから自動的に押し込んでいるのが現状である。当然生徒の親からの苦情が来て、その度に塾内で講師のたらいまわしをしている現場を何回か目撃している。

6. 授業＝商品力の低さ…ほぼ答え合わせをして終わりの授業、生徒を見ないで、やたらと板書ばかりしている授業、自習形式で生徒に演習 問題しかしない授業、生徒に言わせてばかりの一方通行の授業、教師がしゃべってばかりの一方通行の授業。わかりやすい授業の工夫がない。塾で生徒が良く寝ている光景を見る。学校で、目いっぱい授業を受け、またクラブ活動をしてきた状態の状態で授業を受けているのである。この時こそ生徒をひきつける、魅力的な授業が期待されるのである。5月に地方の塾に頼まれて、講演授業を夜の6時半から8時40分まで、休憩なしにやったところ、50名の生徒は誰一人として眠らなかった経験をしてきた。これには、商品力の豊かさ、引き付ける迫力のある話し方、何よりもわかる面白さを生徒に体験させた。生徒は授業が楽しいことを期待して授業に望むのである。しかも1ヶ月に1回の講演授業で有料である。塾費の他に生徒は新たな費用を払わねばならない。費用対効果である。例えば、1万円の授業を私は2万円に見せる授業をしたつもりである。生徒はけっして高いとは誰一人思っていない。支持率100%であったそうである。下手な授業すると、千円でも高いのである。

7. 商品力の高い一人の教師がその魅力とこだわりで生徒を引き付けるそんな塾は無くなったのである。もしそんな教師を見つけられないなら、また育てられないなら塾経営はしてはいけないのである。塾人マインド・塾人スピリット・塾人プライドの教育を今からでも遅くはない。

第18回 失敗した塾総集編その2 《経営者編》

塾は第一次産業でも、第二次産業でも、第三次産業でもない。要するにこの世に無くてもいいのである。なぜ出来たのか。ハッキリしている。公教育のだらしない ささが今日の塾を生んだのである。公教育では生徒の学力アップに何ら効果的な手を打てないのが現実である。大分県で起こった教員採用に手心を権力をもった者が己の利益のためにだけにやってのけた腐りきった事件である。

しかし大分県だけだろうか。私が現役の頃から、教頭になるのに何百万円かかるのか、校長になるにはもっとかかるのかの噂はよく聞いた。おそらくどの県でも叩けばもっと出てくるだろう。不正で採用された教師が全国にもっといと親が疑っても当然である。一方塾はこのなさけない公教育の敵失で発生したゴキブリのようなもので、自らその存在価値と教育理念から生まれたものではない。いわば、棚ぼた産業であり、隙間産業でしかないのである。しかし私は隙間産業でもよしとしている。すきま産業にはそれなりの約束事がある。私の塾ジャーナルのコラムで何回もこの公教育に勝つチャンスは何回もあったと説いてきた。それは：

1. 授業内容（確実に学力アップする教科書の商品化）
2. その商品化したものを生徒にプレゼンする教師の授業力
3. プロとして人間としての魅力ある教師の教育。

この3点に集約される。広義的には商品とは、教材と講師力をいう。

そもそも塾をやるうとした連中は子供が好きで、学校の勉強についていけない、落ちこぼれの子供達を救ってやるうなんて、義侠心を持ってやった人はほとんど いないと言っていいだろう。学生の時に塾でアルバイトをし、卒業してそのまま塾経営に入った輩、あのバブルの時に、塾でもやって、儲けようと言って始めた 輩達である。もともと塾経営でもやるうという輩は、社会性が無いのである。社会と対決して乗り越えていこうとする志は無いのである。自分よりも下の子供と はしゃべれるが大人とはしゃべれないのである。（子供とは会話が出来る塾講師）ファミレスと同じで、自前で講師を雇うノウハウもなく、また講師を教育し、 管理する能力もない人がフランチャイズ方式に乗った守銭奴の連中がほとんどであった。まあ金儲けはいいだろう。しかし恐れ多くも教育産業である。倫理観、 哲学感はなくても、またよう作らんやろうけど、せめてどんな塾にするのかぐらいはなかったらあかんのと違う。もちろんまともな塾はある。私がこの目で見ると、塾のコンセプトを生徒の目線で授業を展開し、売りの商品をかかなり高いレベルで生徒に提供している塾もある。しかし、悲しいかな、このようなまともな塾 は生徒が集まっていない、儲けていないのである。もちろん、経営に欠陥があるのは否めないのだが、授業はまともである。経営が下手なだけである。少なくとも も、偽物の商品を作り、偽物の講師を安く売って儲けてる塾よりは、塾人マインド、塾人スピリット、塾人プライドがある。

■こんな塾経営者なら塾はつぶれる！

1. どんな塾にするんやという見識・知識・動機・理念・目標・計画性がない
2. 制度・ルール・システムを作る気がない
3. 人間的魅力が無い・・・人望・信頼・尊敬がない
4. 学力アップの商品を開発してない、またその気も無い塾の生命線は商品である。「うちはチラシや広告を打たなくても、生徒は集まる」といった優良塾が90年代にバタバタと閉鎖に追い込まれた。使った商品が古くなって役に立たなくなったのである。その指導が商品として魅力を失えば、誰も買わなくなるということだ。商品を常に改良改善し、新商品の開発をしなければならない。古い役に立たなくなった商品を棄てる勇気を持つことだ。
5. 宣伝・広告だけに金を使っている（塾業界 DMの意味 ダメでもともと）
6. 人材育成力がない・・・多くの塾長は教師が大事といいながら、ほとんどの塾は教師の研修に情熱と金をつぎ込んでいない。頑張れだけ連呼する能無し
7. 組織を動かしていく仕組みを勉強していない・・・リーダーは構想力、幹部・スタッフがシステム設計力
8. 講師調達力がない・・・個別指導が相変わらず人気がある。個別指導最大の大手の塾がベネッセに身売り。この背景は、講師調達が困難になってきたのではないかと推察。教室展開→講師不足→講師の質の低下→指導力の低下→悪い評判→身売り。そうそう良質の講師は募集してもいないのが現実である。私の全国講演で見てきた地方の講師陣は未完成であるが、潜在的にいいものを持つ講師は結構いるのである。

問題は彼らを教育する指導者、マニュアルがないことである。自前のプロパーの講師を鍛えることだ。外部のプロにアウトソーシングすることも。

9. 未来志向が無い・・・脱講師も最大の差別化戦略である。良質の講師確保は学校（公立学校）、塾でも困難な状況である。つまり、講師に依存しない塾作り、指導システムを考えなければならない。eラーニング、ブロードバンドのonラインである。日本の塾はこの分野は立ち遅れているし、すでに失敗していることもよく耳にする。失敗した最大の要因は、授業内容である。生徒を馬鹿にしたような低レベルの授業内容にさらに追い打ちをかけた消費期限の切れた能力の無い講師で儲けようとする経営者の方針の無い方針が原因である。
10. コンプライアンスに留意していない・・・成功した塾には特に大事なものはブランドリスクに注意が必要。職員の犯罪、不祥事、生徒への暴力、セクハラ、パワハラ等思わぬところで塾の信頼、信用がダウンして最悪倒産に追い込まれることもありうるのである。情報流出、個人情報の流出は社会的に厳しい追及を受ける。

その他つぶれる理由

1. ケチる塾長・・・儲かっているのに給料を上げない
2. やたらと実力以上に教室展開をする
3. 塾長・幹部が自ら授業しない・・・現場から遠のいて、講師がどうなっているのかほったらかしの状態
4. 見栄・体裁にこだわり直接教育に金を使わないで浪費
5. 資本政策が無知。資金繰りで行き詰る
6. うまい新規事業に迂闊に乗る
7. 誇大広告・・・合格者の水増し
8. 数字の管理に杜撰
9. 根拠無く自信過剰の権力にしがみつく経営者
10. 経営ごっこに走って経営指標で遊ぶ経営者

第19回 教師の品格・教えることの品格とは！

“これぞ品格のない時代錯誤” 大阪の知橋下知事の発言に「あのくそ教育委員会」発言は物議をかもしている。9月14日朝日新聞の29面にかなりな紙面を割いて、今回で退く教育委員の反論を載せている。どうみても朝日新聞がこの委員達を擁護している載せ方だ。問題の本質を追求しないで表に出た橋下知事の発言を載せて、読者の反論を期待しているかのようだ。

「市町村別の平均正答率を公表せよ」といった知事の主張は当然である。過度な競争が生まれるからという理由で公表しないのは責任逃れであり、説得力がない。もともと勉強に限らず、スポーツ・芸術には競走がつくものである。なぜそれを回避するのか。競走させたらいい。そこから子供が成長する最も大事な挫折を経験するのである。

今の児童・生徒にないのは挫折を経験しないで大人になり、しんどさに耐えられないで大人になってギブアップするのがおちだ。どこかの総理 大臣にそっくりである。教育委員会は学力向上になんの手も打ってなかったことの証である。

私は全ての児童・生徒は学力が上がると確信している教師の一人である。「英・数・国・社・理が好きなら一生懸命にやればいいし、スポーツ や絵、音楽が好きならそっちをやればいい」といった言葉はまことにその通りで、何をぐちゃぐちゃいっとんのかと私も言いたい。どの分野にしても競争がつき 物である。教育委員の一人が「ご苦労様、頼むよ、共にがんばろうと言うのが真のリーダーの姿だ」と言ったのには驚いた。仲良しグループじゃねえだろうが。 府民が高い税金を払っている事実を認識しているのか。素人の教育委員を指名した大阪府にも責任がある。結果を出してこそ責任を果たすのと違うのか。「責任 を転嫁し、主体性のない能無し教育委員」と言いたい。

勉強はなりたい自分の可能性を広げるプロセスであり、教師はその援助者である。学校も塾も銭を取ってる以上やらなければならないことが2 つある。必ず学力を上げること。躰をキチントつけることである。初等中等教育の最大の責務である。人間教育はこの2つの過程でこそ成就するのである。

少人数学級が学力や躰にとって絶対必要だということを、教員組合、学者、学校関係者も金科玉条のごとく、皆大合唱している。集団教育の大切さが判っていない。集団教育が成り立たないのは、教師の無能力が原因である。昔の教育はすべて集団教育であった。それをすべて否定するのか。教師の品格 がまったく消滅したといっても過言ではない。

また、2008年、教育研究全国集会の中でのある教師の報告を絶賛した記事を見た。以下のごとくである。38歳の小学5年生の女性の担任 が「嵐の学級」といわれるほど学級運営がうまくいかない。子供がうろうろ歩き回り、大声でわめき、ボールを黒板にぶつけるなど手がつけられないクラスである。そのことを保護者会で報告すると、親達は担任を責めるどころか「先生よくいってくれた、私達で出来ることあれば協力させてください」と受け止めてくれた。都合がつく限り夫婦で授業に入ってくれた。といった記事で、教育研究全国集会がこの報告を評価している内容でした。とんでもない教育放棄であると言いたい。国民の税金で給料をもらっているのである。親が授業に入らないと、授業が成立しないのは教師失格である。即刻首である。もちろん親に協力してもらおう 全てを否定しているわけではない。まず学級運営は教師自ら苦しみ、戦い、努力してこそ教えることの品格が出来るのである。

国家の品格の著者である藤原雅彦氏は次のように警告している。「論理が通ることは脳に心地よいから、人はこのように理解出来る論理にすぐ に飛びついてしまう」。「いじめが多いからカウンセラーを置きましょう」という単純な論理に比べ、「いじめが多いから卑怯を教えましょう」というのが先ず 先だ。大勢で一人をやっつけるのは文句なしに卑怯であるということを叩き込まないといけないのである。大切なことを生徒に、親に、迎合するのではなく、押し 付けよ。学力をつけるのには、最低の基礎を有無を言わずに詰め込むことである。論理思考で教育を考えるのは、大人の、教師の、教育の行政に関わっている エセ権威者である。生徒は論理思考で動くわけではない。

先人から教師の品格を学ぼう！ （丸山敏秋氏の書から）「至誠にして動かざる者なし」と松下村塾を主宰した吉田松陰は言う。真心で接すれば、人は動き、変身するという

意味である。松蔭の 教育の原点であり、品格である。はじめて門を叩いた門人が松蔭に「どうかよろしく教授をお願いいたします」、すると松蔭は「いや、教授など出来ることでは ありません。君と一緒に購読しましょう」、またある時は、感動する物語になると、声を震わせ、満願に涙をたたえ、ひどい時には涙がポタポタと教科書の上に 滴り落ちたという。またある時は、社会悪に対して、髪が逆立つほど怒り、大声を出して熱弁をふるったとも言われている。共に涙し、共に怒り、共に心が通い 合ったという。

最近、NHKで、映画監督の新藤兼人氏（96歳）が、小学校の恩師をモデルにした「先生」という映画を撮ったという番組を見た。新藤氏曰 く、その先生から学んだことは「嘘をいうな、真っ直ぐに生きよ」という言葉が大きな支えとなったと。国内はもちろん、外国でも様々な賞を獲得した大監督で ある新藤氏はその教師の存在を人生の糧にしたということである。一生を小学校の先生で終わった平凡な先生で、いつも生徒には「心から怒り、心から謝る」そ んな先生だったそうです。それを宝にした映画を撮りたかったと。

教師の品格とは、教える品格とは！ 品格とは偉大な人格を持っている人でもなければ、高学歴を持った人でもない。教師はマイナー思考であれといたい。プラス思考なんてくそくえである。マイナー思考をするからプラス思考になるのである。プラス思考しかもってない奴はだだのアホであり、2代目のアホ社長である。最初から自信を持って教壇に立 つわけではない。劣等感、悩み、苦しみ、涙をし、悔しさを経験するからこそ生徒に近づけるのである。 教師は博学であり、尊敬される人間であるためには、先ずマイナー思考からはじめることだ。まだ遅くはない。私は、「生徒と教師の関係は作家と作品の関係」 であると思っている。偽の作家にいい作品はできないのである。作家は苦しんで、戦って、ギブアップしないそんな中でいい作品が出来るのである。

第20回 中堅以下の私立学校経営者の社会的責任

Preparatory Schoolはもともと、アメリカでは名門大学進学のための私立高等学校である。イギリスではパブリックスクールに入るための準備教育する小学校である。

目的がハッキリ、解りやすい。何のために高い授業料を払ってプライベート・スクールに行くのか。アメリカではプライベート・スクールに行ってるだけでステイタスがあるのである。

日本では、一部の名門私立学校をのぞいて、公立高校に入れぬ生徒の受け皿的な高校として今の私立高等学校があるといつてよい。公立高校の発表後、落ちたらどここの私立高校に行こうか、その下請け的の高校にもランクがあつて、下位競走をよぎなくさせられている。

この汚名をつけられて 何年たつのか。公立高校の全入の時代がそこまで来ているのである。経済的に貧しい生徒の教育の機会均等は公立高校が引き受ければいいのである。学力もつか ない、駄もちゃんとしていない、一年に退学者が二桁もある学校もある。そういう私学経営者は私学補助が減らされると、教育の機会均等が奪われると声高らかに主張するのである。公立高校全入になると、私学補助は受益者負担が当たり前になる。最近

の主な公立中高一貫校の競争率は、9.422倍である。一番高いのは千葉県立中学の27.06倍である。

この数字を私学経営者はどうみるか。私は民間教育（私立学校・塾）のファンとしては、今や不安である。

中堅以下の自立出来ない私立高校・中学の就職先は：

1. 名門私大のパイロット校になるか
2. 超特化したユニークな高校にするか
3. 経営をギブアップするか

有名難関私立大学は付属高校までが、経営のテリトリーであった。今や、付属中学・付属小学校までそのテリトリーを広げてきた。最近では京都の同志社小学校がその最たるものである。同志社大学130年の歴史をへて、2006年に小学校開設。小学校から大学までなんと16年の一貫教育である。

16年間の「ゆとり教育」を目出したのであろうか。いやそうではない。経営の安定化であろう。同志社なればのことである。中堅以下の自立出来ない高校はこの名門私大のパイロット校すなわち、M&A対象校でもある。

以前のコラムで、高校の名門化は5年で出来る。大学は100年かかると言ったことがある。今、中堅と中堅以下の大学は303大学（私見）。勉強しない遊び上手な学生のための大学、つまりコンビニ大学・トコロテン式大学に夢はない。

これらの大学で定員割れ、あるいは近い将来定員割れの危機に直面するのは目に見えている。大学にステイタスもなければ、就職の機会も大きくは期待できない。

ましてやこれらの大学の付属高校、付属中学に親は高い授業料を払わないのは当然のことである。中堅以下の大学は少子化もあいまって、今後の将来に希望は持てない。単なる、文学部・経済学部・法学部・商学部等の学部では生き残れない。学者の頭で再生できるとは思わない。中堅以下の大学を有する高校は、名門大学のパイロット校にもなれない法規制がある。この際、夢のない大学を切って、高校に特化して5年計画で進学実績を出すためのドラスティックチェンジが必要である。

公立中高一環教育の脅威・・・塾のあり方・ターゲット学年・教育内容の見直し 公立中入試については、「受験競争が低年齢化しないように、学力テストは行わない」といっているようだが、図形や写真を見て、考える能力を試すのが中心のようだ。

しかし、小学校の勉強だけではまず合格しない。千葉県立中学では「豆腐に7回包丁を入れてさいの目に切る場合、切り方の違いによって出来る個数をすべて答えよ」といった知識より知恵が必要な問題。日本文を読んで、その内容から具体策を何百字で書けといった、いわば大学入試の小論的なもの等々、場合によっては、私立中入試の難しい計算や膨大な暗記ものより難しい。

塾は学校よりフットワークが軽い分だけ、対応が早い。特に小規模塾に公立中高一貫の中学入試対策の商品化を期待したい。今こそ小規模塾の存在感と実績を出してほしい。利益率より信頼される勉強方法で大規模塾と一線を画してもらいたい。おそろしい生徒を集めて、教育を投資家の具に帰する上場なんて時代錯誤であるといいたい。

CHANGE・・・プロを養成する単科高校へのChange・・・Yes, We can!

全国的に見ると、私立高校と公立高校の優劣は圧倒的に公立高校が優の座を占めている。地方では100%近い優位を公立高校が占めているのが現状である。今後、公立中高一貫が全国的に広がって「6ヵ年教育」が定番となると、中堅以下の私立高校は倒産の憂き目を見るのは確実である。

さらに、昨今の経済情勢が追い討ちをかけている。大都会に於ける私立中高の6ヵ年の授業料は、学債や寄付金を除いても、一人約480万かかる。一方公立の中高であると、約140万と私立の3分の1以下で済む。親の学校選択の基準は、進学が一位であることも事実だが、一方で手に職的な考えを持っている親も多いことも事実である。私は進学だけが教育とは思わない。進学よさようなら！公立の進学校、私立の進学校は長い伝統を持っている。よほどの決意を持ってなければ、中堅高校を進学校にするのは至難の技である。同じ土俵での競走は今の中堅私立高校には、余力がないし、何よりも人材（教師）があるとは思えない。この際、ドラスチックチェンジの道を探ってはどうか。その道のエキスパート育成を高校から鍛えてはどうか。たとえば・・・

福祉科、演劇科、ボランティア科、スポーツ科、音楽科、マスコミ科、作家養成科、料理科、絵画科、税理士科、コンピューター科、通訳養成科、自動車設計・整備士科、食料自給率のための農業科、国際金融科等。一般知識や趣味ではなく、プロを養成する手に職的な早期高等教育科の思考を早急に開始すべきであると思う。進学から離れた土俵での再生は将来差別化になると提案したい。

第21回 番外編シリーズ…英語の苦手な人のための入試英語の超勉強法と近道

「読解編」“こんな資料を使えば誰でも必ず偏差値が上がる”

「このシリーズは先生向けである。自分の商品化のために資料は自ら集めてもらいたい」

入試英語の基本的攻略法はテクニックと言っても過言ではない。出題された入試問題の形式（ジャンル）を分析すれば、自ずと何をすればよいかが見えてくる。ほとんどの受験生、受験指導をしている先生方はおそらく遠回りし、時間切れで、なんの効果も出していないのが現実である。塾であろうと、学校であろうと、受験のプロが教えているとは思わない。難関大学突破のテクニックと合格のための資料を持っているとは思えない。

プロによる入試英語の超勉強法と近道【読解編】 【長文読解の攻略法】

英文の単語の意味を全部辞書で引いて知っているのに訳せない。そんな経験のある人はいませんか。その原因は・・・1. 単語を全部訳してる…英語圏の人の表現思考と日本人の表現思考はかなり違っている。受験生は言語学を勉強しているわけではないのだから、キ

チント訳す必要はないのである。何を言ってるかわかればよいのである。端的に言うなら、暴力訳でいいのである。

瀧山英語では、「訳すな英語」といつてる。後述に10か条を示す。

「例」 There are similar festivals even in the big cities where, however, the cherry blossoms arouse the greatest display of enthusiasm.

「単語を全部訳した場合」・・・「しかし、桜の花が熱狂の最大の展示（見世物）を引き起こす大都会において さえ、類似の祭りはある」、この訳では点にならない。

「瀧山の訳すな英語10か条で訳した場合」・・・「大都会にも同じような祭りはある、しかし、そこでは桜の花をみて熱狂的になる」

これで充分合格点である。

1. 後ろから訳していない
2. 無生物主語構文の動詞は基本的に訳さない。主語を副詞的に訳せ。the cherry blossoms「桜の花を見ると、が咲くと」（無生物構文の動詞は資料として必ず持つておくこと。後述に詳しく述べる）
3. The greatest displayは訳していない。（瀧山の10か条よりA of Bは出きるだけBを訳せ）

■文法訳をしている…訳すことで一番障害になるのは文法訳である。

英語は基本的には主語の後に動詞がくるが、日本語では動詞は最後に来る仕組みなので、訳す時に後ろから訳す癖が中学、高校でいやというほど叩き込まれている。これが間違っているのである。少々日本語がぎこちなくても前から訳す訓練をしなければならぬ。日本人がヒアリングが出来ない大きな原因はこの後ろから訳す文法訳が邪魔をしている。英語を後ろから追ってヒアリング出きるわけではない。この際、文法無視である。

「例」 It is only by learning a second language that the Japanese can come to see the world with other eyes than their own.

「文法訳」・・・「日本人が自分自身以外の他の目で世界を見るようになることが出来るのは第二言語を習うことによるのみである」・・・強調構文を後ろから訳したが、合格点はない。

「前から訳した合格点の訳し方」・・・「第二言語を学ぶことによってはじめて、日本人は自分以外の他の目で世界を見る事が出来る」。

- (7) 関係代名詞の形容詞節は訳すな（但し、先行詞が限定されていない場合は訳せ）
- (8) イントロ文は訳すな（強調構文以外の It is~that構文など、It is~thatの中に否定語があれば、that以下の動詞を否定せよ）
- (9) 同格は出きるだけ後の方を訳せ（
- 10) 非常に訳しにくい文は無理して訳すな。前後の文で文脈を類推せよ

以上、あくまで目安であって、絶対ではない。何回もこの10か条に従って、長文を読む訓練すれば、自分なりの飛ばし訳が出来るようになる。要するに、長文読解は訓練すれば誰でも出来る。努力を惜しむな。

【4択問題攻略法】…ここが集中的に出る 4択問題の出題傾向はほぼ一定している。

1. 時制…ここでいう時制は、時制一致を言っていない。すでに時制一致問題は何年も出題されていない。また、動詞を変化させることを時制と規定していない。

- (1) 時・条件を表す副詞節中では、現在は未来形に、未来完了は現在完了に。
- (2) 仮定法現在、仮定法過去、仮定法過去完了。
- (3) 助動詞の過去形。
- (4) 往来、発着を表す動詞の進行形は未来を表す。

2. 語法…動詞の法則：動詞の形を問う問題。（例）have+O(物)+過去分詞、have+O(人)+原形 動詞。 50個程度の動詞語法で十分

3. 基本動詞の派生熟語…全ての動詞の熟語を覚えることは不可能である。最近の傾向は基本動詞に集中している。（例）go, come, look, turn, give等。 30個程度の 動詞の熟語

【語整序問題の攻略法】

- 1. 語法・・・単語の意味ではなく、単語の形を問う。例prevent+人+from+~ing
- 2. 基本動詞の派生熟語・・・come, go, look, think, turn, run, make等瀧山の資料集この単語集で200点満点で110点は取れる

瀧山の「生徒では集めにくい究極の単語集」

- 1. 瀧山の入試頻出英会話表現集
- 2. 瀧山の究極の語法
- 3. 瀧山の基本動詞の派生熟語
- 4. 瀧山の読解に必要なテーマ別語
- 5. 瀧山のあらゆるジャンルに出題される多意味語
- 6. 瀧山の発音・アクセント公式・頻出カタカナ英語
- 7. 瀧山のズバリ的中パターン集瀧山の究極の教材集

1. 瀧山の9割は取れる究極のセンター対策
2. 瀧山の英作文4分の3得点法
3. 瀧山の究極の英文法
4. 瀧山の究極の語い
5. 瀧山のここが一番よく狙われる秘伝合格ストーリー
6. 瀧山のこれを知らないと長文が読めない最重要構文集
7. 瀧山の訳すな英語長文集

[追記] 長い間瀧山のコラム集を読んでいただきありがとうございました。これからも、塾、私立学校に対して、生き残り作戦の提言をしていきたいと思っています。長いこと、言い続けてまいりました民間教育の本来の姿の回復のために努力してまいりたいと思っています。また、受験の英語教育に徹して、生徒達に「受験英語ってこんなに簡単だ」ということを、折に触れ、伝えていくつもりです。学力と共に、人間教育する本物の塾、私立学校こそ、多くの親達が期待している今がそんな時です。 “We can do it!”

第22回 “惜別”母を偲んで

“惜別”母を偲んで・・・ここに私のルーツがある。平成21年9月15日早朝、母、瀧山しきぶが身罷りました。享年100歳でした。明治、大正、昭和、平成と4年代を生きてきました。一言で言うと、凄い母 でした、いや人でした。100歳は、歳から言えば大往生です。長い間生きたこと自体大往生ですが、人生の限りを尽くし、関わるすべての人に心いっぱい愛を分け与えてきたこともまた大事な大往生です。母はそのとおりに生きてきたといえます。

100歳まで生きると、田舎では、昔、祝ったそうです。でも、私には寂しいかぎりです。いつの間にか、母でなく、私にとっては、大先輩であり、師匠です。母は、極貧の家に生まれ、体も弱いせいだったか、小学校中退でした。それからは、家の手伝いや、子守のアルバイトをして家の足しにしたのです。子守をすると品質の悪い黒いお米がもらえるのです。当時の子守唄にこんなものがあります。“ねんねんねん、ねんねしな ねんねした子に 赤いべべ着せる ねんねせん子に 縞のべべ着せる 守を憎いとて 破れ傘着せて かわい我が子に 雨かかる”。

当時の人たちは、子供の頃から、家庭を支えるために、8歳、9歳のころから働いたものでした。11歳の頃には、姉さんと糸くり工場に臨時工として働きに出ました。朝、5時に起きて、線路づたいに一時間以上歩いていくのです。一日12時間労働、休みは月3回でした。でも母が糸くり工場をやめてどうしても付きたい仕事がありました。それは印刷工でした。理由は簡単明瞭。字を学びたかったからです。もっとたくさん字を覚えて、もっと沢山のことを知りたかったそうです。

母の勉強の原点は、世の中のことをもっと“知りたい”ということでした。母は、小さい頃、体が弱かったせいで、小学校もろくに行かず、今で言う“引きこもり”状態で、家事をして毎日を暮らしていた。いったん外に出ると、これも今で言う“いじめに”あったそうです。だから人一倍、字を学びたかったのだろう。買い物に行かされて、店の品書きが読めないんだから。字を覚えるのが必死だった母の気持ちには痛いほど私にはわかります。その当時は、人に馬鹿にされるのが一番悔しかったと後に私に言ったことがあります。

私は、よく教師は、劣等感、悔しさ、惨めさ、悲しさ、一人ぼっちを経験した者でないと子供の前には立てないと主張してきた。挫折を経験しないで教師になったらあかん。極論を言えば、何の苦勞 もしないで、教育大学を付属中学、高校を出て、トコロテン式に卒業した教師に生身の生徒を任せてはいけないのである。

学生のジャリ講師をただ一流大学の学生というだけでなんのチェックもせず京都の塾が採用し、ちょっと反抗されると切れ、かっとなって殺した事件は、許されない典型的な例であろう。

教師は子供 が成長して、親以外に最初に反抗する大人である。反抗は成長の兆しである。学ぶこと、教えることを真剣に考えている教師は何人いるのか、私は、経験上、日本の教師、講師は大半失格であると確信できる。

母の言う、字を覚えたいということは、人間としての知的欲求である。戦争を経験し、6人の子供を身を粉にして、働きながら字を学ぶ姿勢は、私には“先生”である。

83歳の時に、母は一冊の自叙伝を書きました。タイトルは、“和みの歌”である。和み（なごみ）は、平和の和、と出身地和歌山の和を取ってつけた。母はいつも、言ってる言葉は、“皆、和みや”と“人様のために勉強するんやで”である。小学校中退でも、字を覚えただけで詩も俳句も書けるなんてすばらしい、人生に悔いはないよといいながら、逝きました。学ぶことの真理は、明治も、大正 も、昭和も、平成もまったく同じであると改めて心に刻みました。「学ぶこと、教えることってなんかな」今私が一番考えてることが母の供養になると間違いなくそんな気がします。

私の好きな母の詩。

老いてかがやく わが姿
人には 老いて見ゆるとも
心はいつも 花のまさかり
今日謝して
明日九十の春を待つ

(母にとっては90歳の誕生日はまだ青春であったのです)

“なんとかせい”教育シリーズ22は、我が師匠母の追悼とさせていただきます。